
inncoent • blue

tears

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

i n n c o e n t ・ b l u e

【Nコード】

N 3 4 2 4 P

【作者名】

t e a r s

【あらすじ】

俺たちは二人で1つだった…俺がその手を離すまでは…

俺がアナタを守ります…だから側で俺を愛してください…

双子の兄と幼い頃の友達…

俺はお前の特別な人でいたい……お前の最愛の人でなくとも……俺の側で笑って欲しい

絶望の淵で穢れた俺を救い必要としてくれた人

儚い光と暗い闇を抱えながら必死に生きる……deep・redの主人公……シュウの双子の弟・ソウの物語

【1】

「あーどしよ」

一応、自己紹介をするな…結崎^{ユイザキ} 蒼^{ソウ}でこの名門私立 光葉学園に5月という中途半端な時期に入学することになった。

「仕方ない…」

今…学園の門の前に居るけど…閉まっているし…デカイから開けることが出来ない…仕方ないので

「ソウウウウちゃん」

流石ですね、連絡する前に駆けつけるとは…ビックリです

一応、こちらの方も紹介しますね…この黒髪のイケメンな人は…結^{ユイ}
崎^{ザキ} 海斗^{カイト}この私立 光葉学園の理事長…と俺の保護者、いうこと以外は色気のある美形てこと…

「ソウちゃんの未来の夫です」

訂正…超絶な変態親父です

「さあ、理事長室にキングサイズのベッドがあるから愛を確かめようか」

「断る」

都内でも1、2位を争う進学校の理事長を勤めている位だから頭も切れる人なんだろうけど…

「ソウちゃん？まだ5月の始めだから寒いよね、さあ、ベッドで身体を暖めようね」

「だ・ま・れ…職員室は何処だ？」

カイは渋々職員室に案内した。

「ソウちゃん？せっかく校内デートでも…と言いたいけど…仕事で…生徒会長が案内してくる筈だよ…」

「それは安心して校内を見学出来ますね…では仕事に行つてこい」

俺は職員室の前で生徒会長さんを待っていた。

「キミがユイザキくん？」

美人なお兄さんに声を掛けられた、多分…生徒会長さんかな？

「はい…結崎 蒼です」

「失礼…生徒会長を勤めている、キシマ季島 ハルカ遥です」

手を差し出されたけど、手を払った。

「行こうか…」

心なしか沈んでるし、関係無いけど

授業中で生徒はいない、俺も季島会長も黙りしているから静か…

「結崎君？」

「……何ですか？季島会長？」

季島会長はムスツと表情になった。

「あの…その季島会長って呼ぶのやめて…出来れば名前呼びで…」

「わかりました、遥先輩…で話は何ですか？」

「帝王に逆らわないほうが良いよ…狂信者がいるから大変なことになるよ…」

「……………」

「…もう一つ…」

どうやらここからが本題みたい…

「結崎君は見た目が良いから性欲の捌け口にされる可能性があるから気をつけて…」

いやいや、無いですよ、生徒会長さん？

「無いから」

「結崎君くらい綺麗だと、犯されたい人と犯したい人に別れるだろうけど…」

「だから、無いから」

「うーん親衛隊とか狂信者とか出来そうだね」

「聞けよ、てか狂信者ならもう居るし…」

俺は苦笑した。

「え？どついうこと？」

「カイのことだよ」

「カイ？」

「ああ…理事長のことだよ…」

「……………え？」

遥先輩…すごい驚いているよ…

「嘘？うそ？ウソ？」

耳が痛い…そんなに大声出さなくても…

「……………驚くよね、俺…平凡だし」

「……………結崎君くらいの美人だった納得かな？」

「男らしくないし、女顔らしくないからモテないと思うけど…」

遥先輩は思いっきり首を横にふった。

「違うよ……………綺麗だからどっちつかず何だよ…噂は本当だったんだ」

「ウワサ？」

「そう…理事長にはアオっていう片想いの人が…あれ？片想い？」

ああ…言ってなかったね

「俺は理事長とは付き合っていないんだよ…」

「なんで？」

「……俺、昔の好きな人を吹っ切れてないから…そのせいで今、同性愛は無理なんだよ…」

「そうなんだ…」

「…否定はしないけど、受け入れる事が出来ない…もし、気分を悪くしたならゴメンね…」

遥先輩は俺の頭を撫でた。

「ううん、話してくれただけで嬉しいよ……………そうだ、せっかくだし訓練で手を繋ごうか…馴れれば案外うまくいくかもよ?」

「うん、そういうことなら良いよ」

俺は遥先輩に手を差し出した、遥先輩は凄く笑顔で俺の手を取った。

「そつえば、結崎君って理事長と同じ名字だよね」

「うん、一応、理事長の養子ってことで戸籍には登録してるし……でも実際は『名字が一緒だと、結婚してるみたいだから』とか……」

すっかり遥先輩と打ち解けた俺はお互いのことを話していた、

「そうだ、僕も結崎君のこと名前で呼んでいい？」

「いいよ」

「やった」

子供みたいに笑う遥先輩の頭を撫でた。

「……………」

「……………？…どうかしたか？」

「……………いえ…綺麗に笑うなあと思って……」

あれ？顔を背けたし…顔が赤いけど…風邪か？

「顔が赤いけど…大丈夫？風邪？」

俺はおでこをあわせた

「うわっうわっ」

「そんなに嫌がらなくても…」

俺は口を尖らせた…因みに周りの生徒は

「誰？あの美少年は…」

「あんな美人と一緒に…会長とは言え羨ましい」

「あのイケメン…何処かで見た気が…」

「もしかして、新しい生徒会候補？」

生徒会候補？

「生徒会はね人気投票で決まるんだ、因みに帝王はランキング1位だったけど拒否したから帝王って地位が出来たんだよ」

キンコーンカーンコーン

「ゴメンね…蒼君？生徒会の仕事があるからここでお別れだね…昼御飯はどうするの？」

もうそんな時間か…

「弁当作って来たから適当に食べます」

「今度、時間がある時に一緒に食べよう…そうだアドレス交換しようか」

コクコク

「じゃあ赤外線で…またね、バイバイ」

【2】

「此処で良いかな？」

この学校はどうして校内に植物園があるんだろうか？

「んゝ静かだな」

カイが俺の心の治療ために連れてってくれた別荘の庭に似ていて不思議と笑顔が零れた。

「ちょっと、アンタ、ここで何をしてんのよ」

折角いい気分だったのに…オカマとギャルを合わせたような男と綺麗と格好いいを合わせた男が植物園の入り口にいた。

「アンタ…ここが左条院様と理事長の植物園何だからね…一般人が気安く入っていい場所じゃないんだよ」

「……………なら、公共施設に個人の施設を造るなよ…………」

流石に呆れて返した。

「左条院様と理事長を敵に回す気？学園に入れなくなるよ？」

理事長は俺の保護者なんだけど…

「……………」

もう1人の男は凄じい眼で睨んでくるし…………仕方ない…今度は遥先輩と一緒に来るか…

「……………おい…名前は？」

「……………人に名前を尋ねる時は自分から名乗るもんだろ？」

後ろでオカマギャル男が騒いでいたが気にせずに植物園を出て職員室に向かった。

「失礼します」

職員室は広く綺麗に整理整頓されていた。

「お前が結崎か？」

「はい」

金髪ホスト教師は俺を舐めるように見ている。

「アタリか…一応、自己紹介するな…俺は新山^{ニイヤマ} 慎吾^{シンゴ}お前たち1—Sの担任だ…生徒会長からどの程度の説明を受けたか？」

「成績でクラスが決まることくらい」

「うゝん…因みにお前の点数は全教科満点だったぞ」

「ふゝん」

あまりに反応が薄かったらしく

「嬉しくないのか？」

「別に…」

「ふゝん…変わっているな、この学校の生徒は家柄や容姿、学力なんかで付き合い方を決めるんだぜ」

俺は成る程と溜め息をついた。

「さしずめ…理事長と帝王ってのが最上位でその次が生徒会…でその下にその他諸々といったところか？」

「まあな、で蒼？お前は気を付けろ」

「いきなり名前呼びですか…で何をですか？」

新山先生は俺の顔を手で触りながら…

「この学校は可愛いヤツや格好いいヤツは多いけど…お前みたいに綺麗なヤツは少ないから気を付けろって意味だ…生徒会長はまともだがあとの生徒会役員は曲者揃いだから生徒会にも気を付けとけよ」

俺は新山先生の手を払って睨んだ。

「どうでも良いことは置いて…新山先生？何でセクハラするんですか？現在進行形で？」

「さあ…そろそろ教室に行こうか？」

誤魔化されたがいい加減に二人きりは嫌だったんで俺も後を追った。

「……………新山先生？1つ質問しても良いですか？」

「こら、蒼…新山先生じゃなくて慎吾先生でしょ」

「にい「慎吾」にい「慎吾」……………仕方ない慎吾先生？何で俺たちは手を繋いで歩いているんですか？」

……………授業中だから人が居ないから別に良いけど…

「恋人同士なら当然だろ？」

俺たちは何時から恋人同士になったんだよ…

「…着いたぜ…呼ぶから呼んだら入れよ」

ガラッ

「キヤー新山センサー今日もカツコイイ」

「今日の放課後は空いていますか？」

「だいてー」

こわッ

「はいお前ら落ち着けよ？」

「新山先生？何で今日は機嫌がいいんですか？」

あ、1人マトモなのがいたよ…

「勘がいいな…七海…今日は俺の彼女を紹介するぞ…あれ？蒼？」

【3】

「何をしてるんだろ…俺」

ゼエゼエと息を切らし地べたに座った。

「七海…か人違いならどうしよ……………いや、間違える筈が無いよな
…アイツの声を…」

俺は息を整え、カイのところに向かおうとした時

「キミは…ダレ？可愛いね」

ガタイ体型の生徒が俺を囲んだ。

「今日から転入して来た、結崎です…」

この学校はネクタイで学年を区別出来るようになっていて……俺を
囲んでいる生徒は………遥先輩と同じ赤だった…

「ユイザキ君か…センパイたちと楽しいことしようか」
俺は抵抗する間もなく空き教室に連れ込まれた。

カーテンが閉めきられ薄暗い教室の中、俺はただ男たちに抱かれて
いた。

「ッーヤメろ…あああぁ」

「お口が悪いですね……………しっかり躡とかないと…」

足掻く俺の両腕と両足を押さえられ服を脱がされた…俺の喘ぎ声とともに激しさをます愛撫で…どんどん甘くなる声…恥辱による羞恥の涙が零れ落ちる

「カイ…シュウ…」

熱い愛撫でに意識が朦朧し始めたところ急に教室のドアが開いた…

「カイ…シュウ…」

俺は愛しい人の名前を呼んだ

けど………入って来たのはカイでもシュウでもなかった。

「……………なにをしている？」

地を這うような声に俺は身震いをした……………先輩たちも愛撫を止めてその男のほうへ向いた。

「たす……………けて……………あああぁん」

俺が助けを求めると先輩は俺の下半身を弄った。

「大丈夫か？」

いつの間にか駆け寄っていた男の顔はよく見えないが助けてくれたらし…

「とりあえず服を着ろ」

男は先輩を嫌悪と殺意のある眼で見下したあとほぼ、全裸の俺に服

を差し出した。

「……………」

男は溜め息をついて俺に服を着せて、お姫様だっこされたが放心状態の俺は黙って受け入れた。

「……………あ、あの…」

「……………なんだよ」

男の不機嫌そうな声に怯んだが…

「…あ…りが…と…」

俺は男の服を掴みながら消えそうな声で言った。

「なんだよ…」

「……………ッ…助けてくれて……………ありがとう」

「.....」

男の服を離した.....俺は急に來た安心感に意識を手放した。

【1】

「此処は何処だろ……」

えゝと…落ち着いて昨日を思い出そう………確か…先輩に強姦されて知らない男に助けられて…

「あの男の家？」

俺は辺りを見渡した……カイの家に勝るとも劣らない広さと豪華さ………と美形の男……

「なんで…一緒に寝てるんだよ」

俺はダルい身体を起こして制服を探した。

「何処に…あつた」

部屋に掛けられていた制服に着替え着ていていた服を畳んでベッドに置いた。

「ありがとう…また会えたら友達になれたらいいな…」

俺は心配しないように説明と連絡先を書いたメモを残して学校に向かった。

「居ないし…」

カイを捜しているが全然見つからない……携帯にかけてもメールしても返信なし…うーん…授業を受ける気分でもないし…保健室に行

くか…

「失礼します…」

保健室には丁度誰も居なかったなのでベッドにもぐった。

久々に“あの夢を見た”

シユウと俺が遊んでた…俺の“初恋のヒト”と幸せに生活していた
ころの夢

「ふう…俺を捨てたのに今でも愛しているなんてね…」

俺はバイでもなければホモでもない……………女が好きかって聞か
れたら答えに困るけども…

「……………今は何時だ？」

俺は時計を確認すると12時を過ぎていた。

「弁当……………無いから食堂行くか…」

俺は食堂でサンドイッチと紅茶を頼んだ

「ふう…あれから5年……………か」

柄にもなく、感傷に浸っていた……………

「はあ…なんでカイは肝心な時、居ないんだよ」

思わず出た言葉に苦笑した…自分でも驚く位にカイに依存していることに気がついた。

「あれ…ユイザキくんだ」

低い声で甘ったるく話す声に嫌悪感を覚えたが…相手にしないことにした

「ユイザキくん…昨日みたいに楽しいことしようか…」

昨日の先輩たちは俺の腕を掴んだ

「離せよ…」

「いやだ」

先輩たちは俺を囲み逃げ場をなくした。

「蒼君!？」

遥先輩が叫ぶと同時に先輩は後ろに倒された。

「なにす」

先輩たちはいつの間にか後ろにいた男に突っかった。

「デメエ……………昨日の蒼を犯そうとした奴らじゃないか……」

「そうなの？蒼君？」

俺が頷くと遥先輩は俺を犯そうとした先輩たちを睨み付けた。

「成る程……………ソウちゃんが家に帰ってこない心配していたらこ

ういうことが………覚悟は出来てるかな？君達
？」

普段のカイからは想像できない低い声に先輩たちは青ざめた。

食堂は騒然としていた………はりつめた中、遥先輩は場をまとめた。

「とりあえず、君達は風紀委員室に来てもらいます、昶は蒼君を生徒会室に…理事長は先生方に説明を…」

昶？って名前だったんだ…へえーカイとは違う美形だね……黒い髪が色気を醸しているし

「わかった………また後でね…ソウちゃん…」

「………うん………」

俺は素直に頷くとカイは優しく頭を撫でた。

「……………オイ…」

「……………なんで怒っているんですか」

「別に…」

「あの…朝はごめんなさい…少し用事があったから…」

「別に気にしてない…生徒会室にさっさと行くぞ…」

昶先輩は俺の手を引いて生徒会室に向かった

「あ、自己紹介、まだでしたね…結崎です」

「？七海じゃないのか…」

「は？なんで…」

俺は思わず聞き返した。

「理事長に息子はいないだろ…」

成る程…

「俺は理事長の養子として引き取られたから…」

「元の名字は七海…って言うんじゃないか？」

「そうですね…なんで知っているんですか？」

「やっぱり…ソウか…」

あれ？会ったことあったけ…

「左条院先輩？」

「違う」

何が？

「昶だ」

「昶先輩……」

「先輩は止める……お前だけの呼び方がいい……」

……じゃあ……

「アキ……でいいですか？……」

左条院先輩……アキは満足した顔で頷いた

「アキ………はなんで俺の名字が七海だって知っているんだ？」

「……それは」

【2】

（8年前）

ここは確かシュウとよく遊んだ公園だ

「ふああああん」

確かこの時の俺は身体が弱くて…いや今も変わらないけど、細くて女みたいだからよく虐められていた。

「クシュン…」

今は12月…寒さが身に染みる季節の中、俺はよく独りで泣いていた。

「……………ウザ…」

いきなり声が出たので声が出たほうに眼を向けると、美少年？俺と違ってシュウみたいに男らしい体型に整った顔…俺になりたい人そのものだった…

「…ごめん…なさい」

「で…どうした？」

すごい嫌そうな顔で聞いてきたので俺は思わず…

「いえ、何でもありません」

「……………」

今度はすごい睨まれた…

「……………実はですね…」

「クラスの人に虐められていると…」

「……………はい」

「なんでやり返さないだよ」

「やり返さないじゃない……………やり返せないだよ」

「どついう意味だ?」

「……………ぼくは生まれつき身体が弱くて激しい運動が駄目なんだよ…」

「ゴメン…」

俺は君の頭を撫でた…

「そつだ……君の名前は？」

「ごめんなさい……まだ言つてませんでしたね……七海ナナミ 蒼ソウです」

「俺はタカミヤ高宮 アキラ昶だ、よろしくなソウ」

「はい、高宮さん」

高宮さんは不機嫌そつな顔をして、俺にデコピンを食らわせた。

「いったー」

「タカミヤじゃなくて………そつだな……友達だからアダ名で……」

「じゃあ……アキで……」

アキは笑顔で俺を抱き締めた。

「これからよろしくな」

俺はアキを抱き締め返した。

「うん……」

久しぶりの人の体温は心地好かった。

あれから俺たちは一緒に遊ぶことが多かった……アキは俺の心の中ではもう1人の兄さんになっていた……俺にとってアキはシュウとは“違う意味で好きだった”アキにはシュウには相談出来ない学校での悩みを聞いてもらった……おかげで俺はなんとか学校を休まずに行くことが出来たけど

幸せな時間はあまりにも短すぎだ。

「……………アキに相談したいことがあるんだ…」

2月の始め、まさかこの相談が俺たちの関係に亀裂を入れることになるとは…

「……なんだ、また虐めことか？」

「……実はぼく……“好きな人”ができたんだ……」

アキは脅えた顔をして俺の肩を掴んだ。

「……誰だ……」

俺は固い表情で話すアキに怯えながら答えた。

「……俺と同じ男の人……なんだ……変かな？」

「……いや……まさか、この前、一緒に帰った赤髪の男か？」

「……うん……どうした「知るかよ」」

「……アキ？」

「……少しは自分で考えろ」

アキは立ち上がり帰ってしまった、俺はただ呆然とアキの背中を見ていた。

翌日…俺はアキに謝るために何時もの公園に居た。

「……………」

いつまでも来ないので俺は辺りを周り帰ろうとした。

ドン

「いつてなー」

「……………」
「ごめんなさい」

「てめえ…蒼じゃないか…」

「……………」
「ッ」

見覚えのある三人に俺は思わず肩を震わせた。

「邪魔なんだよ…モヤシ野郎」

俺は思い切り殴られて地面に倒れた…同じクラスの子たちは俺の腹を何度か蹴った、もう1人の子は俺を立てせてもう1人の子は俺の腹と顔を殴った。

段々、意識が朦朧してきた、全身に痛みが伝わり一発殴られる度に
身体が悲鳴を上げ…脚はガクガクで力が入らない。

「……………シュー……」

俺は愛しい人の名前を呼ぶが、すぐに首を横にふった…

愛しい人を巻き込みたくない……けど、俺の心は確実に助けを呼んでいた。

「アキイイイイイイたす…けて…よ…」

自分が怒らせたんだ、来るはずがない……俺が諦めたその時…

「ソウ！？退け…お前ら」

アキはクラスの人を殴り倒し、倒れかけた俺を支えた。

「大丈夫か？ソウ？」

俺は何とか力なく頷いた、アキは頷いた瞬間に強く抱き締めた。

「救急車を今呼んだから……本当にごめん」

「……大丈夫……だから……謝らないでよ」

途切れ途切れに話す俺を見てアキは涙を流した。

「俺がソウを守る……何が有っても守って見せる……だから……だから、そばに居てくれよ……俺はソウが好きだから、想いに答えなくていい……俺のことを好きにならないでいい……だからそばに居てくれよ……頼む」

「……ありがとう」

俺はそれだけを言つと意識を失った。

【3】

（現在）

俺は思い出して顔が真っ赤になった。

「……………ソウ？」

アキは俺の顔を覗きこんだ。

「……………ソウ……………」めん……」

「え？」

「あのあと独りにして……」めん……」

「え？」

「母さんが再婚して色々と忙しかったから」

嬉しい…カイといい、アキといい、俺はいつもいい人に愛されている。

「……………今は幸せ？」

「ああ…ソウがいて幸せ」

「なら…いい、嫌われたと思ったから…」

そう…俺はアキとカイの想いに答えてない…

「なんでだよ？」

「俺はアキとカイの想いに答えてない……………まだ迷っているんだ……………」

アキもカイも俺の大事人だから……………そして……………“アイツ”も

アキはニヤリと笑って

「……………安心しろ……………いずれはいつも俺が居ないと駄目っ
てくらい惚れさせてやるから」

俺も思わず言い返した。

「……………アキって何様？」

「……………俺様……………」

「言っておくけど……………俺はガードが堅いよ……………」

アキはクツクツと笑いながら俺に顔を近づけてきた。

「別にいいけど……………俺は我慢強くないぜ」

「は？……………んう」

反撃しようとする唇を奪われた。

「らめえ…おね……………がい……………やめ……………」

激しいキスに腰が砕け、唾液が口から零れ落ちた、涙腺が緩みいつの間にか涙を流していた。

「……………悪い」

アキは唇を離すとまず、謝ってきた。

「……………大丈夫だけど、まだ“こういうこと”は待ってよね……………」

「……………わかった」

ゴメンね、アキ、カイ……………多分……………いや、きっと傷つけてしまっけど、ありがとう

そして……………アイツ……………もし、“アイツ”が本当にこの学校にいるなら、俺は……………どうすれば、いいんだろ、きつと……………

「……………ソウ？怒っているのか？」

「……………違うよ……………少し考え事をしていたんだよ」

本当にゴメンね、カイにアキ、そして“アイツ”……………俺が
弱いから……………カイよりも、アキよりも、アイツよりも弱い
から多分……………“最悪の結果”になるかも…

【1】

「おはよ…ソウちゃん？」

俺は朝ご飯を作る手を止めずに返事をした

「おはよ、あれ？カイ、今日は午後からじゃないのか？」

「うん…けど、ソウちゃんに色々あったから心配だから午前から出る…」

「あ、朝は余りでいいよね？」

「何の？」

「弁当の」

「弁当……って、もしかしてソウちゃん、弁当を作ったの？」

「うん……カイの分もあるよ……よし出来た」

俺は火を止めて盛り付けようとすると後ろからカイが抱き締めてきた。

「……………カイ？」

「……………良かった、元気そうで…襲われたって言うから心配したけど……本当に良かった」

カイの温もりに心が癒された。

「俺は平気だよ、カイやアキがいるから……」

カイはそつと俺を離れた。

「……………さあ食べよ、折角ソウちゃんが作ったご飯を暖か

「うちに食べたいし」

カイはいつも以上の笑顔を俺に見せた。

「じゃあ、また……………晩御飯は期待して…」

「もしかして……………晩御飯のおかずはソウちゃん!？」

「……………晩御飯はカップ麺…カイだけ…」

俺は職員室に向かうと後ろから『ソウちゃん!？ごめん、嘘だからね…晩御飯、期待してるからね、ほんとだよ!』なんて叫んでいる人がいたけど、気にしない。

「今度はちゃんと待ってるよ…」

「わかりました……あ、俺は慎吾先生の恋人ではないですよ」

慎吾先生はあからさまにへこんだけど気にしないでいこ

「転校生を紹介するぞー」

あ、マトモにSHRしてるよ…

「……………マトモにすれば惚れるのに……」

「！……………それは本当か……」

いつの間に……

「ハイハイ……で入っていいの？」

「その話はあとで詳しくな……入っても良いぞ」

俺は深呼吸をした……………恐らく、この扉の向こうにいる“アイツ”

「大丈夫…きっと…」

俺は教室に入り黒板の前に立った。

「今日から１―Ｓの生徒になった、結崎君だ…」

俺は目を泳がせて“アイツ”を見ないようにした。

「今日から１―Ｓにお世話になります、結崎 蒼です……………よろしく
お願いします」

『噂じゃあ凄いイケメンだって言うから期待したけど……………想像以上のイケメンだよ』

『綺麗…』

『受けかな？攻めかな？』

クラスは俺の話題で盛り上がっていたが俺の耳には届くことは無かった。

「……………」

「……………」

身体が麻痺して動かない……………五感が停止して俺は“アイツ”以外
は認識出来なかった……………安堵、不安、恐怖、そして
……………愛情

幾つもの感情が溢れては俺の心を締め付けた。

「……………ウ、ソウ！」

「うん？……………あ、はい」

いけない……………かなり、ボーツとしていたみたい

「大丈夫かよ？席は彼処な……」

「……………ッ、マジ？」

なんと……………
の隣だとは……………
“アイツ”

「久しぶり……………シュウ」

俺はシュウの隣の席に座り笑顔で挨拶をした、シュウはしかめっ面を驚きの表情に変えて俺を見つめた。

そう……………“アイツ”こと…七海^{ナナミ} 朱^{シュウ}…………俺の双子の兄

そして、俺の初恋の人…

この時はまだ知らなかった、シュウと再会したことで俺が“最悪の選択”をするなんて思っても見なかった

俺にとってシュウは世界で.....希望、そのものだから.....

【2】

「うーん」

5月の開放感溢れる青空と心地よい陽気が昼休みの屋上を満たしている

「あー疲れた…」

転校してから1週間が過ぎてクラスに馴染む………ワケなく、
何時も質問攻めを喰らい、休み時間を奪われている

「全く、アキやカイが有名なせいで俺までとばかりを受けるなんて…」

まあそれはさておき………シューとは席が隣同士
であるとはいえ話す機会は少なく、挨拶程度と言っただけで避けられ
ている感じが否定できない…

「1番の問題は…此方か」

携帯が震えた…授業中に鳴ると面倒なのでマナーモードにしている、
正直…携帯が無いと色々と厄介なことになるので気を使っている。

「はい………お久しぶりですね、結菜さん…」

この人は左条院サジョウイン 結菜アキの母親の再婚者の弟の嫁さんらしい

「陽平さんからの伝言ですか？」

左条院サジョウイン 陽平結菜さんの夫で俺の過去を知る“唯一の人物”で昔から色々とお世話になっている人物でもある

「ええ、そうよ」

「そうですか……周りに人はいませんのでどうぞ」

「……検査の結果は予想よりは良好ではあるけど……」

「確率はどのくらい何ですか？」

「良くてもう割……最悪の場合は3割あるかないか……」

「……期限はいつまで？」

「2学期までには答えが欲しいわね……」

「わかりました、その他はいつも通りで……」

「ええ……海斗さんにはまだ……」

「はい……」

「……………」

「どうかしましたか？」

「何でもないまたね……」

「はい、また」

チャイムが鳴り、昼休みの終わりを告げた。

「……………きくん、結崎くん」

「何だよ」

俺は睡眠を妨げた人を見た。

「結崎くん…授業中だよ…」

「ハイハイ」

俺はまた、机に伏せた。

「結崎くん？今はテストの為の自習なんだからちゃんとしないと…」

「……………」

とりあえず…面倒なのでシカトをすることにしました。

「起きろ、ソウ」

「何だよ…」

シュウまで邪魔を…

「ちゃんと勉強しないと補習ですよ、結崎くん…」

「安心しろよ、少なくともチビよりは俺は頭はいいから…」

チビは眼に涙を溜めたが俺は気にせずに昼寝の続きを始めた。

「イデ…」

「いくらなんでも言い過ぎた…歩はソウのために…」

「…事実だし…それとチビ、ここの二次方程式、間違っているぞ」

「チビじゃない……………うそ？」

「公式の方から間違っているぞ……………それに名前を知らないから仕方ないだろ？」

「じゃあ自己紹介しますね…」

「興味ないからいいですよ…」

「……………」

泣きそうになってるよ…

「ソウはツンデレ受けだから気にしないでね？」

「なんでいるんだよ」

コイツを見るとため息しか出ないな…

「俺は結城^{ユウキ} 和哉^{カズヤ} なみにこの綺麗な顔を歪ませて俺を睨んでいるのは結崎 蒼……………君たちは？」

「小日…」

「しなくていいから、チビ」

「ソウ？流石に怒るよ？」

シュウなんか言ったがスルーして……

「和哉のことだ、大方、チビとシュウの名前くらいは調べてあるだろう？」

「さすが…ソウ、バレたか」

「…………腐ってる…………」

「結崎くん…酷いよ」

「別にいつものことだよ……………ところで小日向くん…帝王と最近ど

う？」

和哉はチビの抗議を軽く流した。

「帝王？」

確か……生徒会長を辞退したヤツの為に設けられた地位だっけ……

「蒼、帝王って知っているか？」

「知っているけど……それがなに？」

「小日向くんは帝王のセフレなんだよ」

セフレって……あの？

「小日向君？久しぶりだね……」

「……久しぶり」

「季島先輩に左条院先輩…わざわざどうして」

チビ……………もとい小日向くんの顔が赤いし…なるほど…

「蒼……………小日向くんは帝王のことが好きなんだよ…でも帝王はあまり乗り気じゃないんだよ」

和哉が頼んでもない解説してきた

「ふうん」

「ソウ……………余計なことをするなよ？」

シュウ……………そんなこと言われたらしたくなるだろうが…まあアキも遥先輩も俺の存在に気付いてないみたいだし…和哉がデカイから俺が隠れてるだよね……………って和哉のヤツ凄いニヤニヤしてるし…

「小日向君？昶がセフレのことで話があるって…」

俺はアキにこっそり近づいた。

「実は……」

「左条院先輩？セフレって何ですか？」

「ソウ！？」

「蒼！？」

「蒼君！？」

「……………結崎くん？」

みんなの驚いているし……

「……………ソウ？」

アキは青ざめているし……

「左条院先輩？セフレって何ですか？」

俺は笑顔でもう一度アキに聞いてみた……………笑顔が重要だぞ

「ご、誤解だ、ソウ…」

「ふ〜ん」

「まあ、落ち着け」

いや、アキが勝手に焦っているだけなんだけど…………

「じゃあ、俺は邪魔みたいだから帰るね」

「ソウ！？待って…」

ドスッ

アキが俺の肩を掴んだので鞆で少し……………ね

シュウと遙先輩は、は？って顔しているし、小日向くんはビククリして尻餅をついているし、和哉は…………

「まさかの俺様美形×ツンデレ美少年！？これはもえ

ドスッ

「燃え尽きる…」

和哉を黙らせたあと、マジでへこんだアキを見て少しやり過ぎたことを自覚して教室を後にした。

【3】

「……………と言ったんだよ」

いつもの朝御飯……………違うのはトーストではなく和食とカイではなく俺が作ったってところ

「チッ左条院のヤローソウちゃんを……………覚えてるよ……」

「何か言った？」

凄く低い声がしたけど……

「言っていないよ……それより……………ソウちゃん？」

「なに？」

「……………友達を作らないの？」

「……………作らないじゃない…適当な相手が居ないから…」

「適当な相手？」

「そ、小日向くんのような相手は色々過去に詮索されるから駄目、程よく技量よく俺との距離を取れるヤツか、本気で俺と向き合うことが出来る人でないと、無理」

カイはなるほど、と納得しながら頷いた。

「…で見つかりそう？バンドのメンバー」

「難しい…」

……………和哉のドラムと俺のヴォーカル以外はさっぱりなんだよなあ…

「……………やっぱり簡単にはいかないか…」

..... シュウが入れば楽なんだけどキツイなあ

「.....おい」

「どうした？」

「どうした？って凄い顔をしていたぞ」

カイは眉間に人差し指を当てて俺に言った。

「.....うん」

「さて、ソウちゃんは先に行って、俺は片付けてから行くから」

カイはいつも“こういう話”になるとそれとなく話題をそらす...知りたいはずなのにね

「海斗？」

「なに？」

「行ってくるね…」

「行つてらっしゃい…」

カイのいつもの笑顔に送り出されて家を出た、澄んだ蒼い空はどんな憂いも吹き飛ばしてくれた。

深い闇の中…俺は独りで歩いていた、不意に前に光が現れる、俺はその光に向かって歩き出す……………

光にはアキ、遥先輩、和哉、カイ……………そしてシュウが俺を待
っていた……………けど

……………後ろに独りの男性が立っていた……………振り返るとその男は声
を出さずに涙を流していた……………俺はその男の方に向かって
走り出していた。

そして俺の視界は真っ暗に閉ざされた。

「……………あれ…ん…ゆい…きくん」

「ソウ！」

「うん？」

「結崎くん？寝過ぎですよ」

ああ…今は夢か…

「お前…赤点取っても知らんぞ」

「ハイハイ…」

俺はぼーと窓の向こうを見ていた。

「終わった……結崎くん？さっきの授業のノートを……あれ？結

崎くん？」

授業が終わると俺は次の授業を受ける気に馴れなかったから保健室に向かった。

「失礼しますっていないし…好都合だけど」

保険医……………仕事してんのか？なんて下らないことを考えながらベッドに潜り込んだ。

「うゝん今は何時だ？」

「今、5限目が終わったところだよ」

うわぁ…2限目からずっと寝ていたのかよ…

和哉は俺を心配そうに見ていた…………

「ん？…」

何？

「どうか…」

俺は和哉の手を引いてベッドに倒した。

「なに…」

俺は……………

……………和哉にキスをしていた。

「やめ……………んん」

和哉が喋ろうとした瞬間に俺は舌を入れた、俺は和哉の口の中を蹂躪した。

舌を執拗に絡めてわざといやらしい音をたてた、キスの快感に和哉は溺れていった。

「クチャ」

俺が口を離すと…和哉はシーツを強く握り締めていた。

「なんてことするだよ」

和哉が怒りと恐怖を混ぜたような瞳で俺を見つめていた……………
……………けど、俺はこの底なしの欲望の抑え方を知らなかった。

「はあはあ……………お願い許して蒼……………」

俺は和哉の下半身に手をかけた。

「そこだけは……………って……………うわぁ」

俺はなんとか理性を働かして和哉を突き飛ばした。

危ない……………マジで最後までやるところだった……………

「マジでごめん……………大丈夫……………な分けないか……………」

俺はドアの方を一瞥して脱がした和哉のシャツを着せてボタンを締めた。

「ごめんな……………気持ち悪かったろ」

「気持ちはよかったけど……………ってなに言わすんだよ……………」

この人……俺を殺す気？

「なにを言ってるんだよ……」

俺はドアをもう一度だけ見て和哉を見た。

「キスマークも無いみたいだし、大丈夫だよな？」

一度、色んな意味を含んだ溜め息をついた。

「……………どうしたらそんなに上手くなるんだろ……」

「それはけい……………って和哉こそ、俺に何を言わすんだよ……まあ、それは置いといて和哉はこれからどうする？」

うっかり答えるところだった……

「一応、授業に出るよ……」

「大丈夫……だよな……俺というより……」

「そんなことないよ……蒼はまだ休むの？」

「今さら行っても仕方ないし、このまま休んでる」

和哉はじゃあって言って保健室を出た。

「はあ…最悪…」

親友を抱きそうになったことで酷い自己嫌悪になった俺はとりあえず6限目が終わるまで寝ることにした。

「……………ちゃん…ソウちゃん」

俺は声の主を見た。

「カイ？」

「ソウちゃん？大丈夫？」

「カイ…どうしてここに？」

「和哉くんがソウちゃんが体調が悪いみたいって教えてくれて…
そしたらソウちゃんが青ざめて寝ていたから…」

また、和哉に迷惑をかけたな…

「鞆を取ってくる…」

俺はベッドから立ち上がる

「ソウちゃん…はい、和哉くんが持ってきてくれたよ」

「ふう帰るか…今日のゴハンは簡単なカレーな」

俺はあのあとカイの車で家に帰った。

「カレーは簡単だからあらかじめ食材を買い置きして正解だね……」

「……………すっかり、主夫になっているし」

カレーの食材自体、色んな料理に使われるからな

「……………でなんかあったの？」

カレーと福神漬けを置いて俺も食事をすることにした。

「まあ……色々？」

「色々？つて……」

カイは疲れたような溜め息をついた。

「だって本当に色々あったし……」

登校初日にいきなり襲われたし、朝目覚めたら知らない人の家いたり……

「まあ色々あったな……まだ、1週間も経ってないけど……まあ話せる分は話して……」

「……………その前に聞いていい？」

「何を？」

「海斗はなんで俺を拾ったの？」

「……………どうした…急に」

「俺はみんなが知らない暗い過去があるんだよ……………それに俺は…」

カイは俺の隣に来て抱き締めた。

「……………それでもソウが帰る家はここだよ…」

確かにここは俺の居場所かも知れない…けど…

「……………カイともっと早く出会っていたらよかったのにね…」

「どづいつ意味？」

「少しこのままでいてほしいって意味…」

今はまだこの温もりを感じていた

【4】

あれから1週間たち……中間テストも既に終わりで結果を待つばかりだった。

「あーだる」

「結崎くん？テストはどうでしたか？」

「他人の心配より自分の心配しろ」

小日向くんは何時も通りに対処した。

「ソウ…お前、ちゃんとテスト勉強したか？」

なんか……シユウがオカンになっているよ…

「……昔は格好良かったのに…」

「……………どういう意味だ？ソウ」

「……………別に…あと和哉？俺がテスト勉強に付き合ってたんだから……………赤点取ったら…」

「……………だ 大丈夫…多分 あんなスパルタ受けたから…」

最近、何気にシュウ 小日向くん^と和哉と一緒に行動を共にしているから

「あ、今回はぼくは14位です、2つ上がりました」

掲示板に順位が貼り出され小日向くんが喜びながら言ってきた。

「げ……………俺は2位だ」

「おやおや……………七海くん？随分と不調みたいですね…」

…なんだろこの如何にも面倒そうな人は…

「^{サイトウ}斎藤 ^{タツマ}龍真……………テメエは相変わらず…」

「斎藤くん？……ってあの？」

「？」

「蒼は知らないんだ…」

「……………」

「斎藤 龍真…あの結崎 左条院財閥の次に大きいとされる斎藤家……」

「……………」

「この光葉学園では理事長と帝王以外はさかえないんだよ」

「……………」

「中学の時に俺がテストで龍真を抜かしてから目の仇されていて迷惑しているんだよ」

「……………」

「…フン、今までまぐれで勝ってもこれからそうはいかないからな…」

「……………ZZZZ」

「「「「こんな状況で寝落ちかよ（ですか」「」「」

……………うるさい

俺はシュウたちを睨み付けた。

「……………どうでもいいことで騒ぐなよ……………あと、
斎藤くん？万年2位から3位に昇格おめでとございます…」

俺は面倒臭そうに掲示板を指してあげた。
「なにを…」

斎藤くんは掲示板を見て凍りついた。

「嘘…」

「おい」

「俺もビーぐはぁ」

俺は軽く和哉にボディープローをかました。

「自重しろ……………だつたらついでになんか食べに行こうぜ…」

「ねえ…………シカトは一種の虐めだよ…」

…………なんかチャラいのがなんか言ってきたがシカトしてみます。

「俺は料理の本と新作の文庫本を買いたい…」

「じゃあ…行こうか…七海と小日向はどうする？」

「え〜と…行きたいですけど…」

チャラ男を見て気まずそうに言ってきたけど…………スルーで

「俺も行くよ…しかし、ソウ…ユキトを凄いくらいスルーしたな…」

「褒めてもなにもでないよ…」

眼鏡の斎藤とチャラ男のユキ…ト？が頼んでもないのに話に加わった。

「僕もどうしてもって言うなら一緒に行っても良いよ…」

「よし…俺も行く」

「シュウ、小日向くん、和哉…さっさと準備して行くよ…」

「おーBえゴハア…」

俺は軽く和哉のみぞおちを殴った。

「お前は自重という言葉を知らないのか？全く……いつか痛い目に遭うぞ」

「え？どういう意味？」

やれやれ……“あの人”も苦勞するよ…

「なんか………七海くん以上の強者ですね…」

「ああ…」

シュウと小日向くんに呆れた眼で見つめられた。

俺と和哉は目的の本が買えてウキウキ…眼鏡とへたれ君はイライラ…
シュウと小日向くんは何故かフラフラ…

「……大丈夫？シュウと小日向くん？」

「「誰のせいだよ（ですか）」」

二人とも仲良しさんだな…

「……………眼鏡とへたれ君？」

「それは誰だよ」「」

いや…君たちだよ？

「仲いいね……………四人とも…」

「」「良くないから」「」

良いじゃん…

「……………はははあ…なんか会話が成ったってないけど…」

小日向くん……………疲れた顔して…

「小日向……………大丈夫か？」

「そんなに仲良くしても和哉しか喜ばないよ」

「「「「は？」「」「」

シュウの間抜け顔…………ウケる

「実は俺…………腐男子なんだ」

「ふだんし？」

小日向くん…………呆けてるし

「なんだ？腐男子って」

「腐女子って知ってる？」

「……………ああ」

呆然としたまま、シュウが答えた。

「と同じで男同士の恋愛を見るのが好きな人のこと…」

「……………凄いカミングアウトだな…」

まあね…

「えゝとなんで結崎くんは知ってるの？」

「うん？ああコイツそれで中学の頃、虐めにあっていたし……………てか、言って良かったの？」

「うん…蒼の兄貴だし、気にしないかなって…」

和哉は笑顔でシュウと俺を見ていた……………若干、シュウが照れていたのは気のせいではないな…

「僕は心が広いから別にそんなことは気にしないよ…」

「まあ…俺は格好いいから妄想したくなる気持ちはわかるぜ」

「「あ…いたんだ？」」

眼鏡の方はあからさまにイライラ…へたれ君は涙目になった。

「少し…いや、軽く空気だったよね」

「なんだと」

「蒼…このフレンチにしようよ」

「いいよ…」

「……………頼むから少しは人の話を聞け」

「断る」

あからさまにシュウと小日向くんは呆れた

「……………で、値段を考えず食べたらお金が足りないと……………」

この四人ときたら財布の中身を考えずに食べて所持金不足とは……………
…しかも、眼鏡は習い事で先に帰ったし……………やれやれ

「シュウ……………お前は飲食店でバイトしてなかったか？」

「……………たかが飲食店のバイトではこの額は払えないです……………」

「……………四人で約2万円ですか……………」

さすがに……………ね

「……………仕方無い……………今日は俺の奢りにしときます……………」

「大丈夫なのか？」

へたれ君の分まで払うのはシャクですが…

「……………お前の財布……………カード以外入ってないじゃん大丈夫なのか？」

シュウ……

「……………いつ、見たんですか？」

「……………本屋で少し……」

まあ……いいか

「……………最近、お金で買い物したことあまりないんだよな……」

「……………え？じゃあどうやって？」

「そりゃ……………カードで……まあ海斗さんが金持ちだから金銭面では心配は要りないからな……」

あいつは俺に月のお小遣いが10万円だからな……………幾らなんでも

使いきれない…

「ホントにいいんですか？」

「ああ2万くらい大した出費にならないし」

「お前はどんな生活を送っているんだ？」

俺はシュウの耳元に近づき囁いた。

「内緒」

だから…耳まで真っ赤にして怒らなくても良くない？

「まあ……………海斗さんは何気にセレブですからね…その上子煩悩に金銭感覚皆無と素晴らしい方ですからね…」

元々、裕福な家庭育ちの俺もびっくりなくらいですからね。

「蒼？月のお小遣いはいくら？」

「……………10万」

「……………年間？」

「……………月間…」

四人とも固まったし…

「まさか……身売りしてないだろうな」

こういうことになるとシユウは煩いんだよな…

「してないって夏休みにシユウにも紹介するよ……それよりはデザートはどう？ここね……デザートも人気なんだよ」

「じゃあお言葉に甘えて頂きます」

「あー食った食った…」

「食べ過ぎ……」

「結崎くん…今日はご馳走になりました」

「まあ気にすんな」

「解散するか？」

多少疑問に思っていたけど…

「みんな何処に住んでるの？」

「僕は駅前のマンションに両親と…」

「俺も小日向と同じマンションで両親と…」

チャラ男と小日向くんは近くなんだ…

「俺は住宅街で従兄弟と主に二人暮らし」

なるほど……………和哉と“あの人”はもうそんな関係に…

「……………さぞや、楽しいだろ？」

「うん……………いい人だし、楽しいよ」

俺の揶揄に気付いてないよ…

俺は和哉に気づかれないように溜め息をついた。

「俺は最近出来た、海岸沿いにある高層マンションの近くのバーの二階に住んでいる…」

「凄い近く……………てか、そのマンションに俺は住んでいる…」

「…マジ？でもなかなか見ないけど…」

「最近になって引っ越して来たんだよ…じゃあ…一緒に帰るか…」

俺たちは近くの家同士で帰った

気まずい……三年間という時間はどうも俺たちの壁になっていた。

「ソウ？」

「シュウ？なに？」

「父さんはどうした？」

シュウは俺に背中を向けて聞いてきた………しかしかけられたその声には怒気が含まれていた。

「……………死んだよ……………」

「……………ソウ？」

俺は平然と答えた。

「……………シュウが家を出てから一年後に交通事故で……話はそれだけ？」

あまりにも淡々と答えた過ぎたのか……シュウは俺の顔を見て焦っている。

「ソウ？俺がいない間、何が

「別に……………」

「はあ？」

「何もないよ…」

「何もない……って、嘘だろ？お前なんか変だぞ…」

俺はシュウの眼を見た……その眼は怯え…恐怖…絶望…あらゆる
負の感情が写していた。

「だから？」

それでも俺には冷めた声と返事しか出来なかった。

「………なんだよ…いい加減に拗ねてないでちゃんと話せ
よ…」

シュウは苛立ちを隠せずにいる……長年の勘で悟った俺は…

「俺に頼らないで自分で調べたら？」

思わない反論にシュウは押し黙った。

「じゃあ…ね」

俺はシュウに眼をあわずに別れを告げて自分の部屋に向かいベッドに飛び込みそのまま眠りについた。

【5】

翌日…

「はあ…」

病院の待ち合い室でとりあえず自動販売機の紅茶片手に後悔中

「溜め息ついたら幸せ逃げちゃうよ…」

「逃げちゃうほど、幸せがあればインデスケドネ…」

「なんで最後は片言なの？迷える少年よ……お姉さんに全てを告白しなさい…」

下手に隠すと後が面倒なので昨日ことを話した。

「……………という訳です」

「……………結崎さん…アンタにどれだけ注ぎ込んでいるのよ……」

確かにそうだけど…

「……………気になるとこそこのなの？」

「ゴメン、ゴメン…というか…朱も蒼も素直じゃないからな……」

うるせえー

「悪かったな……」

「まあ……………それはいいとして…蒼？ “今日の検査” のことはどう学校に説明したの？」

結菜さんはコーヒーを買って俺の向かいに座った。

「本当は診断書が必要だけど…カイが適当に…」

「……………アンタにはとことん甘いのね…」

「それがどうかしたんですか？」

「……………不安定な今の朱に“この話”キツいかな…って」

「……………」

「ゴメン…今のはさすがに不謹慎だったわね……………ソウ？」

（10年前）

季節の変わり目…元々、身体が弱い俺は確實ってほど…この時季は風邪を引いた…

「ダルい…」

俺は身体の免疫力が他の同年代の子に比べて格段に弱く…ただの風邪でも1週間は高熱が続くと…インフルエンザなんだと確実に入院する羽目になる…

「はあ…」

今日の診断で精神的に参っていた俺は身体を起こして…部屋の時計を見た…22時…

「シュウは寝たかな？」

「ふう…今日は疲れたな…」

「…また風邪か…お父さんとお母さんに迷惑をかけたかな？」

思わず出た独り言に溜め息が出た。

「……………バカなことかん考えたな……………」

自嘲気味に笑いながらベッドから立ち上がった…今日の診断は……
3日前に倒れた原因を探るためのものだった……

『ソウは心臓に重い難病を患っています……………ソウは17歳まで生きられるかどうか……………』

陽平さんの言葉が俺の心で反芻した

そのあとは覚えてはない……………ただ、呆然としていたことだけは確かだが…

「……………しつかりしなくちゃ……………」

俺の父さんは国際的にシェアの広いIT企業の重役…母さんは弁護士として毎日忙しくしていた……………あの頃はそんな両親が俺が風邪を引いただけで仕事を休んで看病するだけで純粹に嬉しかった。

俺は喉の渴きを潤すためにリビングに降りた……………幸い、シュウは父さんの部屋で寝ているので起こさずに済んだ。

「……………だからなんで……………の世話しなきゃいけないのよ……………」

俺は普段では聞くことのない母さんの怒鳴り声に思わず立ち止まった。

「……………仕方ないだろ……………それにシュウの成績に影響したら大変だ……………」

話し相手は父さんようで近所でも評判の仲良し夫婦からはうかがえない光景に俺はただ、呆然としながらことの推移を見守った。

『なんで…あんな…ソウなんが生まれたのよ…』

『知るかよ…双子なら兄と同じように生まれれば良いものを…』

く現在く

あのあとの出来事は霧がかかったように思い出せないんだよ…“あの頃”からだったかな？俺は学校でも家でも喋らなくなったのは…シュウや周りの人は1週間前にあった“誘拐”が原因だと考えたけど……両親は多分、俺が“ほんとうのこと”を気づいているからだって気づいていたはず…まあ知ったからってどうにかなるわけではないけどね

…そういえば、誘拐されかけた時にたまたま通りすがりのお兄さんに助けられたけど………急いでいたみたいだから名前は聞けなかったから探しようもないけど…格好いい人だったなあ…

中年の脂ぎった唇でキスをされたら確かにトラウマになるけど…その頃からだったかな？…シユウがやたらとキスを求めるようになったのは…

「ふう…」

「蒼…？」

「どうかしましたか？」

「蒼こそどうしたの…さっきから黙ったままで………何度も呼んだけど…答えないし」

「すみません…少し考え事を…」

「……………家族のことか？」

「陽平さん？何時から…」

「あなたがブーツとしてから30分後くらいからいるわよ…」

結菜さんは心配そうに俺の顔を覗きこんだ…

「大丈夫ですよ……………検査結果は？」

二人とも誤魔化されて不本意なのか溜め息をついた。

「……………余程、強い発作がでない限りは大丈夫だ…いつも服薬している薬は飲むように……………それと季節の変わり目……………風邪が発作の引き金になるといけないから体調が悪く感じたら私たちのところに来るように…いいか？」

「はい…わかりました」

「結崎さんと担任の新山先生にも伝えただけ…激しい運動も避けなさい…それと薬の効きが弱く感じたり…発作が収まらない場合や周期が短くなった場合…はこの前、教えた番号にかけることいいわね

「？」

「はい……」

「それから……」

このあと薬の種類や副作用を二時間みっちり教え込まれた……

「あー疲れた……」

病院から程近いスーパーで晩御飯の買い物をしている……

「結崎くん？どうしたんですか？」

「……」

「…………グズッ」

「ウソウソ…冗談だよ…どうしたんだよ、小日向くん？」

泣き出しそうになったので慌て小日向くんのところに駆け寄った…

「ば、晩御飯の買い物です…」

「俺もだよ」

「良かったら一緒にどうですか？」

「別にいいぞ」

俺たちは野菜コーナーで淡色野菜を眺めていた。

「結崎くんのご家庭の晩御飯はいつも結崎くんが？」

「最近はそうだけど…小日向くんも？」

「はい…両親が共働きで」

意外…何気に甘やかされて育っているって思っていたから…

「へえー」

「そういえば…結崎くん…今日は検査でしたよね…大丈夫だったんですか？」

普通の倫理観でいえばすでに大丈夫ではないが…

「大丈夫じゃなければここで普通に買い物してないだろ…」

「そうですけど…七海くんが凄いい心配してましたから…どうしても気になって…」

「まあ…持病みたいなもんだからいちいち気にしても仕方ないけどな」

「持病？」

「俺は普通の人と違って免疫力が弱いんだ…」

「そうですか…大変ですね」

まあ……………カイが馬鹿が付くほど過保護だからそんなにつて程では無いけど…

「確かにそうだけど愚痴ってもよくはないよ……」

「……………あのお……」

小日向くんは聞きづらそうに訊ねてきた。

「なんだ？」

「…ぼくのこと……………嫌いですか？」

「別に……」

「……………なんか避けられている気がします……」

避けてはないが…

「…気のせいだろ」

「そうですか…」

気まずいまま俺たちは会計を済ませた。

「そうだ…結崎くん？」

「…なんだよ」

気まずい雰囲気の中、小日向くんが話し掛けてきた。

「七海くんが昨日はゴメン……って」

「……ふん…あっそ」

「何かあったんですか？」

「別に？何もないけど…じゃあ俺はこっちの方向だし…」

「……………はい…また明日…学校で…」

「ああ…」

俺たちは短く別れの挨拶を交わして帰宅の路についた。

【6】

「いくら…身体弱いからって最近の診断時間…長くないか？」

朝食を取りながら昨日遅くに帰ってきたカイの診断結果を報告したら…勘繰られたよ………チツ…こんな時だけ鋭い…

「そうかな？新しい環境と季節の変わり目だから陽平さんたちが心配するのは仕方無いと思うけど…」

…まあ…要因は他にもあるけど…

「そうか？薬の種類も増えてるし…」

「少し…切り替えているからだよ…こっちのほうが良いからって…
…持っている薬を全部服薬しているわけではないし」

嘘はついてない………実際に長く同じ薬を使うと効き目が薄くなることがある…そのたびに薬を変えては違う副作用に苦しむ……

「………暫く、学校を休むか？手続きは俺が何とかするが…」

薄々勘づいているなカイ

「…まだ大丈夫だよ」

いくらカイが優しいからって甘えるわけにいかないな…

「…そうか」

今は聞かないでいてくれるだね…

「…じゃあ時間だしもう行くね」

でももう少ししたらすべて話すよ……………“あの事”も

「ああ…」

俺は誤魔化すように家を飛び出した。

「ふう……」

今日は1限目からおサボリ…

「学校来た意味ないじゃん…」

S H R 前に軽い発作が起きて保健室で休んでいたがある程度、楽になったので屋上でおサボリ…

シユウを恋愛対象として見始めたのは小さな願いに？に似た誓いだ
った

俺は両親のあの言葉を聞いて以来 ある意味 狂気じみた勢いで勉強に励んだ 発作が起きようが 熱が39度を超えようが 勉強を欠かすことがなく 両親や陽平さんがいくら止めても聞かなかったし聞く気は無かった そんな日々が1年間も続ければ 検査結果は最悪だし より倒れやすくなっていた

その頃 俺のシユウの認識はスキップの激しい兄と言ったくらいで特に恋愛感情は皆無だった、猛勉強の結果、俺とシユウは私立小学校に無事入学した。

今、思い出しても微笑ましい思い出だと思う……

確か……小2の頃……あの頃の俺には嫌味にしかない宿題が出された

将来の夢……あの頃はただ……両親の反抗心から勉強に勤しみ……両親の作り笑顔に軽い吐き気を覚えながら、悲しみと絶望から自分自身を追いこんでいた。

だから俺はシュウの夢を写そうとした

「ふふふ……“ソウを守る”……か」

“守れなかった約束”とはいえ……意外にも心に刻み込まれていた……あの頃の俺はただ誰かに愛されたいだけだったのかもしれない

もしかしたら……“今も”

昼休みが終わるチャイムが鳴る……俺はダルい身体を起こして教室に向かった。

「……蒼？大丈夫なのか？」

教室に入ると俺を見つけた和哉が近づいてきた。

「ヘーキ…それより…授業はなに？」

「世界史…図書館でグループで宗教の調べ学習…ちなみにグループは七海に小日向と俺と蒼ね…七海たちは先に行ったから…」

「何でお前はここにいるんだよ…」

「これから保健室に蒼の様子を見に行くところだったんだよ……七海がやけに心配してたから」

なるほど…

「あつそ……じゃあ行くか」

俺たちは必要な物を持って教室を出た。

「あ、結崎くん…体調は大丈夫ですか？」

「ああ…ヘーキ」

俺たちはシュウたちと同じ机に腰掛けた。

「……………で俺たちはなにを調べるんだ？」

「確か…………旧約聖書だったはず」

和哉はシャペンを回しながら答えた。

「旧約聖書？」

「確か…受胎告知？とか？」

思わず俺は頭を抱えた。

「……………それは新約聖書」

「ゴメン、ゴメン…確かミカエルが聖母マリアにイエス・キリストを授かったことを伝えたこと」

「受胎告知の天使の名前はミカエルではなくガブリエル…」

来月の期末テストも大変だな……………俺が

「さあ……………和哉に歴史を教えると日が暮れるから…始めるよ」

「ははは…はあ」

「つたく……………“あの人”は和哉にどんな風に勉強を教えてるんだ？」

「あれ？結崎くんは眼鏡…」

小日向くんは眼を指して聞いてきた。

「うん？ああ…俺、いつも深夜まで……………たまに朝まで勉強してたから自然と眼が悪くなって…中学の時から掛けているんだよ」

俺はとりあえず…新約聖書を取ってから答えた。

「結崎くんって学校では勉強しませんよね…」

「まあ……………簡単だし」

和哉は姑に苛められた嫁みたいな顔で睨んできた。

「羨ましいね…顔も良くて成績まで完璧なんて…」

「……………お前の恋人も似たようなもんだろ…」

俺は和哉に聞こえないように呟いた。

俺たちは二組に別れて手分けすることにした。

「こんなもんか……」

俺はレポートを見ながら言った。

「頭が…脳ミソが…」

「図書館では静かにしろ……」

和哉を叱ってシュウたちと片付けに取り掛かった。

「オース…お前ら順調か…」

「ゲッ新山……」

「七海？随分な挨拶だな……」

俺は借りた本を返ししながら担任とシュウのやり取りを見た。

「小日向くん？あの二人なにやってるの？」

「ああいつもあんな感じでじゃれあっているんですよ」

「さすがに図書館では迷惑だな……」

俺は図書館で騒いでる二人に近づいた。

「二人とも、図書館では静かにしなさい」

「なんだ………蒼？」

あれ？慎吾先生の顔が赤いけど……

「………どうかしましたか？」

「………ッ」

額をくっ付けたけど熱はない………風邪じゃないのか？

グイッ…

「シュウ？」

何故か…シュウが後ろから引つ張られた。

「人の弟に手を出してんじゃねよ…」

「弟？名字違うぞ？」

「訳ありで違うの…」

「でも似てないだろ…」

「普通の人によく間違えますよ？」

小学校の時は担任からクラスメイトまでほとんど間違えたし…

「なんか………雰囲気が違う…」

「あ、わかります…七海くんは格好いいけど…結崎くんは格好いい

というより綺麗って感じですし……」

「ますます、わからない……顔は一緒だろ？」

「ですけど……髪型とか色とか……服装も……七海くんは着崩しています
が……結崎くんはキッチリ着けてますし」

「なるほど……てかソウ？なんで髪を染めたんだ……」

「別に……理由はないよ」

「ふん？」

シユウが理由を話すまで逃がしませんって顔をしているし……

「……………」

「……………」

「……………笑うなよ……」

「笑わないから……」

シュウ……どこか和哉から慎吾先生まで興味津々……

「……………白髪染め……」

「「「「は？」「」「」

みんな…ポカンっていう効果音が聞こえそうな顔してるし…

「うううう…だから、若白髪なんだよ」

シュウは何故か深刻そうな顔をした。

「それって……………病気と“俺のこと”でのストレスで？」

「大丈夫………少しだし気分転換になったし………それより……シュウはどうして染めたの？」

ちゃんと笑えてるかな？………たまに自分がどんな顔しているのかわからなくなる………

「本当に大丈夫かよ…」

大丈夫だよ…“あの頃”と違って…俺は強くなったよ…だから、そんな顔しないでよ…シユウ

「まあ…一種の意思表示かな？」

「意思表示？」

「ある意味…現実逃避かな」

この3年間……俺たちの永い距離を生んでいた…

キンコーンカーンコーン

「悪い…お前ら…今日は職員会議があるんだ…他の生徒も帰してくる」

「あ…今日は両親が帰ってくる日だ…ごめんなさい…失礼します」

「今日は外せない用事があるからゴメン……」

「悪い……ソウ……今日はバイトなんだ……」

みんな各々帰る準備をした。

「さて………俺も行くか……」

……俺は鞆を肩に掛けてカイのマンションとは別の方向に向かった。

【7】

閑静な住宅街…ここは都内でも人気の高い敷地で主に国際的に有名な企業の重役か弁護士など…高所得者がマイホームを建てるに静かな一等地…

ここは普段は人通りが少なく…この住民は大抵は夜遅くまで仕事が出張でいない…

「……………」

俺は視姦されているような錯覚に陥りながら馴れた道を進んだ。

「よし……………着いた」

約一年ぶりの我が家……俺は辺りに誰もいないことを確認した。

俺は鍵で玄関のドアを開けて中に入った………そこで俺は両親の寝室に入り親名義の通帳と判子を取りだし家を後にした。

「ソウちゃん？」

「うわああわあ」

ビツクリした…

「カイか…」

「なんでそんなに驚いてるの？」

「なんでっていきなり声をかけられたから……」

「呼んでも返事が無かったし……マンションの入り口で妙に怯えてるし……どうかした？」

どうやらいつの間にかマンションに着いていたみたい……カイはオートロックを解除して中に入った……さすが、一流マンションで中はかなり広く綺麗な作りになっている……カイはエレベーターで最上階の自室に向かった。

俺はカイをお風呂に行かせてず夕食の準備に取り掛かった。

「で……最近……どうかしたの？」

「少しだけでいいなら…」

カイは深く頷いた。

「……………実は……………シュウに双子の兄が光葉学園の生徒だったんだ……………」

カイは非常に驚いたようで持っていたスプーンを落とした。

「……………は？どういうことだ？」

「……………家は出ていった限りだから会うことはない……………って思っていたから……………」

よりによってこんな大変な時期に……………」

「……………なんか……………会いたくないって顔だな……………」

「……………別に……………そういうわけではないけど……………」

「それは今だからってことか？」

「……………まあ…そうだな」

やっぱり…勘づいているな

「ソウ？何を考えている？」

なにつて…

「相手を思いやるのは大事だけど…対話を怠ってはいけないよ…人の視野は狭いから自身の感情に左右されやすいからね…ちゃんと目を見開いてしっかりと自分の意見を持ちつつ他者の意見に耳を貸して自分の思考の欠点を補ってゆく…これは大人の人でも出来てない人のほうが多いから大変だけど頑張つて…」

俺はカイの言葉にギクツとした…………俺は一度、対話を怠って大切な人と自分自身を傷付けた…それが今ここにしている理由でもある

「ソウちゃん？」

「…………大丈夫…あ、食器片付けるね」

俺は食べ終わった食器を流し台に運んだ…

「対話…か」

カイは片付けたい仕事があるからって自室に籠っていてリビングには俺だけ

「なあ…シュウ…俺たちは対話を怠ったから別々に歩いてるのかな？」

知りたくないことは知っているのに知りたいことは知らない…

「どちらにせよ……このままではいられないな…」

俺は食器を洗い終わると自分の部屋に向かった。

俺は鞆から今日家から持ち出した通帳を取り出した……金額は相当な数字で30年位は遊んで暮らせる…

「はあ……」

正直…両親の話をするのは嫌だ…思い出してもいい記憶はない…

「あーどうしよう…」

シュウはバイトしてるから確実に裕福な暮らしをしているとは言えない……必要最小限だけを貰ってあとはあげようかな…

「どちらにせよ…一筋縄ではいかないだろうなあ…」

俺はシドや a p u a t i m e z と言った好きな歌手の歌を聞きながら目を閉じた。

【8】

1 限目の体育…なんだが…

はあ…

「今日も体育は見学か？」

「はい…」

「事情は聞いてるから木陰で休んでろ」

俺は体育教師に言われた通りに木陰で休んだ…

「…………ふあ…………」

暇なんで読みかけの小説を読んだ…5月の終わりに差し掛かり少しづつ暑くなったが木陰は涼しく過ごしやすい…

「蒼君？」

「遥先輩…こんにちは、どうしたんですかこんな時間に？」

まだ授業中…生徒会長がサボったら世話ない…

「ああ…今、進路についての講習だけど…私はもう進路を決めているから…」

なるほど…この光葉学園は主に進学する人がほとんどで大抵がそれぞれの方面で有名な大学に進学する…それだけに力を入れて取り組んでおり二年生の1学期から月に2度だけ進路学習を設けて早め意思決定して教師陣があとの1年で確実に志望校に入れるようにカリキュラムを組む…

遥先輩のように学力、内申が良好な生徒はこの時間は自由になる…ごくわずかだけだね。

「彼氏を見に来たんですか？」

遥先輩は俺のストレートな質問に苦笑した。

「いつから気付いたの？」

「転校して少してから…前から話を聞いていたからもしかしたらって…特徴が一致してたし…」

「蒼くんと仲いいですからね…」

「まあ…腐れ縁だな…」

「そう言わずに仲よくしてくださいね」

そう言いながら愛しい人を見つめる遥先輩の眼差しは優しく…

「ソーウー飲み物買ってきたぞ…脱水症状ならないように飲んどけよ…」

「どうも…」

和哉は飲み物を俺に手渡して木陰に座った。

「和哉君…こんにちは…」

「遥さん…こんにちは…進路学習は終わったんですか？」

「ええ…和哉君はどうしてここに？」

「俺のサッカーのチームは次が試合だよ」

「頑張ってください…蒼君はスポーツは得意ですか？」

「テクニクはあるけど……蒼は体力が無いから…」

和哉は得意気に答えた。

「悪かったな…」

「拗ねるなって…そろそろだし…行ってくる」

「ここで応援してますね…」

和哉はシュウたちと同じチームらしく仲良く会話してるのが見える…

「妬くなよ？」

「妬きませんよ…」

黒い髪の男がシュウに話しかけているシュウとじゃれていて二人の仲の良さが窺える

「…どうしたんですか？ 凄い険しい顔して…」

「…なんでも無いです」

どうやら無意識に顔をしかめていたようだ………確かに苛立っている…小6の夏休みに…急に行方知らずになり…その理由を親父に聞いたところ…俺に原因があると言われただけでそれ以上は答えてもらってない…親父と口論になったらしいが詳しい内容は知らない…あの時はどれだけ自分を責めたか…俺に非があるならいつてほしかった、確かに依存していたことは認めるがそれでも急に目の前から消えてしまつくらいなら多々無理をしても何とかしたのに…

友達を作るなどとは言わないけど……逃げないでほしい、切実にそう思う……なあ、あの男にはどれくらい話したんだ？家族のこと……自分のこと……そして俺のこと……今、シユウにとって俺はなんだ？恋人？友人？弟？……“あの時の言葉”は嘘だったのか？なあ……俺はシユウまで俺を裏切ったら何を信じればいいんだ？

「……………」

泣き出しそうな俺を遥先輩は不安げに見ていた……俺はその視線に気づけずにいた……

「はあ……」

ふつと黒い髪の男の表情に気が付いた……………

……楽しそう……昔は俺もあんな風にシユウと笑っていた……………

……………ああ……この感情は……

嫉妬だ…

「蒼君？」

「……………どうかしましたか？」

よほど酷い顔をしていたらしく遥先輩は気まずそうだ…

「いえ…皆さんに差し入れを考えていたんですが…飲み物を買ってあげようと思いましたが…」

「別にそこまで気を使わなくてもいいと思うけど…まあ…体育のあとだからスポーツドリンクなんかはベストなんじゃないですか？」

「そうですね…買ってきます…蒼君はほしい物がありますか？」

「いや…けど…朝御飯食べ損ねたから…カロリーメイトくらいは食べたい…」

「なんでまた…」

「貧血で食欲が無かったんで」

授業に突入って訳…

「そうですか…」

それだけを聞くと遙先輩は財布を持って自動販売機のある方に向かった…

シュウと黒い髪の男はまだ話し込んでいた…不意に男が俺の方に向いた……俺は思い切り睨み男も睨み返してきた………

俺は少し離れた所で見ていた和哉を見た…和哉も俺を見ると苦笑して肩をすくめた…そういうことか…

黒い髪の男はシュウが好きでシュウも特別な感情を抱いてる…

「はあ…」

黒い髪の男は野球らしくシュウから離れて行った。

幸人に龍真？……も野球らしく…運動場の離れた所にいた…

「あ…」

さっきの黒い髪の男が打った球がいい感じに当たりサッカーのコー
トに…って

「シュウ…上、上、見て…」

シュウは、は？って顔で俺を見て動かない…………俺は考えるより
先にシュウの元に走った…

「七海！避ける！」

和哉は大声で叫んだがシュウは状況を理解してない…

ゴンッ
…

痛い

「結崎くん！」

「蒼！大丈夫か？」

どうやら…シュウを突き飛ばした際に俺に当たったらしい…

「うわ…結崎くん！病院に行かないと…」

大袈裟たる…

「よいしょ、大丈夫…とりあえず保健室に行ってくる…」

「ソウ…大丈夫か？俺が…」

バシッ

………あ

「ゴメン…大丈夫だから」

俺はシュウの手を払ってしまったようだ……小日向くんは驚いた表情で…和哉は何か言いたげな表情で…俺を見ていた…

「じゃあ行ってくるな！」

俺はシュウの顔を見ずに保健室に向かった…

「失礼します……」

消毒液の匂い……通いなれた病院に似た匂い……

「はいはい……どうしま……」

途中で切れるほど酷いのか？

「えっと…結崎君？どうしたの？その怪我…」

「体育の授業で野球の硬球に当たってしまいました…」

養護教諭は氷を取り出し当たった所を冷やしてくれた……

「とりあえず……病院の眼科に行きなさい……」

「わかりました……理事長は仕事中は携帯取らないんで連絡お願いします」

「わかった……大人しくしてなさい……」

俺はポケットから携帯を取り出してある人に向けた……

「はい……結菜です……」

「結菜さん？」

「蒼？どうしたの？」

「はい……野球の硬球が当たってしまて……」

「大丈夫？……あ、今日は水曜日よね？確か眼科は水曜日は午後か

らだつたはずよ」

マジか…

「わかりました……1日早いですがいつもの診断もついでに…」

「そうね…次いでにね…陽平には言っておくね…私は今日は夜勤だから迎えに来るね」

「わかりました…助かります…では、また」

「着いたら電話するね…」

ふう…色々あつて疲れたな…カイにメールを送って寝るか…

『件名…病院…』

聞いたと思うけど…怪我したから結菜さんと一緒に病院に行きますので…心配すんなよ『』

俺がメールを送って2分くらいで返信が来た…

『件名… R e 病院…』

わかった…終わった迎えに来るね…電話してね…くれぐれも気を付けて…』

俺はメールを確認してベッドにもぐった。

フワッと何かが髪に触れた…俺はその心地よい感覚によって目が覚めた…

「…………ソウ？」

「シュウか…どうした？」

「ボールが当たって怪我したから…心配で…」

「……………大丈夫だよ…今は何時って授業中じゃん…教室に戻ったら？」

心が軋む…シュウの顔を直視出来ない…

俺は起き上がり…ベッドから立ち上がった…

「…悪い…」

いきなり謝ったシュウに理由を聞こうとすると…口に何かに触れた…

柔らかい……………これは…

キスだ…

「シュ… うん… あん」

少し口を開くと舌が侵入してきた… シュウの舌は俺の舌を絡めてきた…
俺は必死にシュウの舌から逃れようとするが器用に絡めて俺の口を食った…

「いや… ん、ふあん… だあ… めえ」

一瞬、自分の声か？ っ て疑いたくなる甘い声が漏れる… 理性が欲求にじわじわ変化していく…

クチャクチャ

口を食う音が俺の聴覚を支配し… 俺は酸素を求めて口を離そうとするがシュウはそれを許さないと言わんばかりにキスを深くしていく… シュウは腰が砕けた俺の腰を片手で支え、もう片方は逃げようとする俺の頭を固定した… 自分とは違うしっかりと筋肉のついた腕… 俺はシュウの男らしい色気に理性は毒されて

いった…

「はぁん…んん…ゆる……してえ…」

俺は涙目になりながら懇願した……いくら逃げても絡みつく舌…
徐々に力が抜けていく躰……どんどん強くなる快感を求めるココロ…

「うん……はぁはぁ…」

お互いの口が離れた……シユウは俺と繋がった銀色の線を色っぽく舐めた…

「ソウ……」

シユウの低い声に俺の理性は限界を迎えた…

また…シユウはキスをしてきた……今度は抵抗することなく舌を絡めた…俺はシユウの制服にしがみつきキスの快感に酔った…

深いキスを味わったあと俺の口から零れた唾液をシュウは舌で拭き取った…

「ゴメン…ソウ…怪我してるのに…」

シュウはボールが当たったほうの目に氷を当ててながら謝ってきた…

フルフル…

俺はなんとか頭を横にふった…

「本当に大丈夫か？なんか我慢出来なかった…」

「大丈夫だよ…そんなに速い球じゃないし…」

「良かった…思ったより酷くなくて…最初はびっくりしたし…」

シユウは俺の身体を横にして布団を掛けて近くにあった椅子に腰掛けた…

「マジで驚いたからな……………俺が担ごうとしたら…」

あ…………

「ゴメン…………」

あの男への嫉妬と昔のように接してくれないシユウへの苛立ちから手を払ってしまった…

「……………いいよ…それより…キスして悪かったな…」

「ねえ…」

俺は黒い髪の男のことを聞くことにした…

「……俺がボールに当たる前に話してた人って…誰？」

「……………誰って緑のことか？」

俺はコクリと頷いた…

「なんなのアイツは？ “こついうこと” してるの？ 俺はなんだよ…」

「ソウ…」

「なんだよ…急に…居なくなったりして…親父は俺が原因だ…言うからどれだけ自分を責めたか……なのにアイツにはヘラヘラして…」

俺は一気に話すと俯いてシーツを握り締めた…

「ソウ……ゴメン…俺が居ない間も愛してくれただね…」

コクリ…

「ゴメン…俺も…ずっと愛してたよ…」

フワリとシユウは髪を撫でた。

「う…そ…だ？」

「ほんとだよ…辛い思いさせてゴメン…」

ガラッ……

「蒼？鞆取ってきたよ…」

和哉は俺の鞆を掲げて保健室に入ってきた…

「……………」

いや…厭らしい状態では無いけど…このタイミングで…ね？

「……………」

「どうした？……………はっ……………ゴメン……………もしかして……………もしか
しなくても邪魔？失礼しました……………」

俺たちが無言でいると和哉は勝手に勘違い……………じゃないか
…察して？保健室を出ようとしたのを俺は止めた…

「落ち着け……………いや、お前……………教室に戻ったふりして覗き見るつも
りだろ……………」

なんで疑問形じゃないかなんて聞くなよ……………

「俺としたことが……………七海が居ない時点で気付けたのに……………」

危ない……………

「それは残念だね……………和哉？光葉学園で充実した3年感を過ごしたよね？」

「モチロンさ……………わぁ！うお！ぎゃ！」

「なに？急に变な悲鳴を上げて…」

急に青ざめて…どつ…

「……………なんで怒っているの？」

「さぁ？…なんのこと？」

口調は柔らかいのに目は笑ってない…まさか？

「まさかとは思うけど…和哉に妬いてる？」

和哉はシュウに怯えて保健室のドアから頭だけ出してる状況なんだけど……………てか…凶星？なんかシュウの後ろに黒いのが追加されたされたけど…

「はあ…シュウ？和哉は彼氏がいるから心配しなくても…」

「なんで知ってる？」

はあ…

「それは中学の時にあんなに好きな人のことを詳しく聞かされたら嫌でもわかるよ」

「なるほど…待て…わざとだろ？校内案内の時に手を繋いでたの…ばあ…みぎや…」

和哉…余計なことを…

「ねえ…くわ「結崎くん？怪我した…て聞いたけど…大丈夫？」

なに？このタイミング？まあ…助かったけど…

「どうしたの？空気が重いけど…和哉君？なんで怯えてるの

「？」

和哉は助かったと言わんばかりに遥先輩の後ろに隠れたよ…

「それは男の醜いしっ……………ゴメンなさい、嘘です、本当にゴメンなさい」

途中からシュウの後ろから阿修羅？みたいのが見える……………和哉…
ビビりすぎだろ…180？の奴が子供みたいにすると引く…

「和哉君？とりあえず落ち着いてね？」

「シュウ…落ち着け…視線で和哉を殺す気？全く…嫉妬深いんだから…」

遥先輩は和哉を俺はシュウをなだめた……

「嫉妬深いは蒼も一緒だろ？全く普段は全然似てない癖にこういうことになるって似てくるなあ……………」

「マジか？」

シユウは信じられないって顔で和哉を見た…

「あの男と話してる七海を見て凄い顔してたからな…蒼は…七海は蒼と話すときは笑わないからな…」

「なんか…お邪魔かな？」

顔が真っ赤な俺を見て状況を察した遥先輩は気まずそうに聞いてきた…

「そうだね…お二人さん、ごゆっくり…」

「遥先輩…和哉が覗き見しないようにしっかりと連れ帰ってくださいね」

一応、釘を打っておく…

「わかった…」

「ちえ…」

「イチヤイチヤが見たいなら家でたっぷりしてあげますよ…」

遥先輩たちもイチャつき始めたけど…まあいつか！

「ソウ…」

「なに？」

シュウは触れるだけのキスをしてきた…

「授業はいいの？」

「授業よりソウに触れたい…」

次はゆつくりと額にキスを落とした…目頭…頬…唇…まるで味わうようにキスをしてきた…

「……………ばか…」

俺は一通りキスの嵐が止むとシュウに文句を言っただつてもりが……快感に酔った俺の言葉は弱く……

P P P
...

「ゴメン...えっと結菜さん？」

「ゴメン！蒼...急患入ったから迎えに行けない...」

「大丈夫ですよ...」

「ゴメンね...着いたら連絡してね」

「はい...」

「何だって？」

シユウは電話している最中に飲み物を買いに行つてたらしい...

「結菜さん...迎えに来れないって...」

「これ...はい...じゃあ二人で行こうか？」

「いいよ…」

俺は自分から手を繋いだ

俺たちは躓きつつも確実にけど前に進んでいた……そう……
あの頃みたいにくっくると……

【9】

「ここて…」

病院も終わり、連れてこられたのは

「俺の部屋…だけど？」

なるほど……

「いや、なんでだよ……ひゃ？なに？」

服の中に冷たいものが…

「シュウ……ダメ」

服に入っていた手が一度止まった……

「ソウ………色っぽい」

「は？……ちょっと待って……あん ふわぁん あぁん」

急に動き出した手は胸の突起に触れて弄んだ

「だめえ……」

「あ！」

「どうした」

急に大声を上げたシュウは俺から離れクローゼットから黒いチヨッキとシャツを取り出した。

「ソウ……ゴメン、今日はバイトなんだ……………」

そいつは好都合……………」

「わかった」

「すまん」

安心したシュウに俺は一言……………」

「当分、禁欲ね……」

「ソウ……………」怒ってる?」

意外に効いたらしい

「冗談だよ……………」頑張つてね」

俺はシュウの頬に優しくキスをした

「……………」おっ」

俺は部屋から出ていつものマンションに帰った

カイクにシュウに送ってもらったことをメールで伝え、2分くらいで返信が返ってきた……暇なのかな？

「えっと……今日は帰ってこれない………さらに
好都合だな」

俺はタンスからワイシャツにネクタイと七分のズボンに着替えてマンスションを出た。

「いらっしやい……………子供の遊び場じゃないぜ……………ここは」

失礼な……………まあ高校生はガキか…

「ちゃんとわかっていますよ」

俺はカウンター席に腰掛けた……………大学生くらいの人水を出してくれた。

「どうも、あ！俺は結崎 蒼……………お兄さんは？」

「東野^{トウノ} 緋人^{ヒイト}だ餓鬼……………年はいくつだ？」

少しヤンキーみたいな東野さん……………バーって薄暗いな……………

「今年で16です……………って餓鬼って名前、教えたでしょ」

「…でご注文は？」

「話をそらしたし…海鮮風パスタとアイステイーで」

「マスター海鮮風パスタとアイステイーの注文が入りました…」

俺はバーを見渡した……意外に広くどうやらバーで行われるイベントに合わせてセットできるみたいだ…

「東野さん…このバーってどんなイベントやったりするんですか？」

「ロックやジャズみたいな音楽やジャグリングもあるな……まあこの辺はバーがここ意外は少ないからな」

「確か……ここは結崎財閥が雅樹さんに運営を任せているですよね？」

「そうだけど……まさかお前……」

「海鮮風パスタとアイステイーです……どうした緋人？」

カイと同じくらいの男性が料理を持ってきた。

「マスターこのガ……蒼？って人知ってますか？」

「いや……」

この人がマスターってことは……

「結崎って名字なんです」

「海斗のところの子か？海斗となんかあったか？」

「今日は違いますよ……………雅樹さん」

「じゃあなんで？」

「その前に自己紹介を俺は結崎……………えっと旧名は七海 蒼です」

雅樹さんは目を見開いた。

「暗くて顔が見えないから気づけなかった……………君が蒼君？」

「はい……………そんなにかしこまらないでください……………いつも兄がお世話になってます」

「いえ……………こちらこそお世話して……………いや、助かってます」

相当、苦勞しているみたいですね

「は？どうゆうことですか、マスター？」

「この子は朱の双子の弟の蒼君だよ……………緋人は朱の兄みたいなもんだ」

「こいつが？」

「はい……………まあシユウは変なところは俺に似てますからね……
……少し心配してたんですよ」

「そうか？今日は何で来たんですか？喧嘩したって聞いたけど」

「仲直りしましたよ……………シユウの部屋でゆっくりしてたけど
バイトだから……………海斗さんも今日はお仕事で帰ってこないの
で来てしまいました……………迷惑でしたか？」

「いや……………こちらこそ海斗が世話になってます……………ま
あアイツは無愛想だから嫌気刺すことがあるかも知れないが仲良
してくれよ」

「いえ……………いい人ですよ」

「嘘つけ」

「本当ですよ……………嫌いにはなれませんが……………ま
……シユウに似てますから……………
」

俺は思わず笑ってしまった。

「笑えないよ……」

「ははは…そう言えば、今日はどんなイベントがあるんですか？」

「星蘭学園の生徒による演奏会だよ」

星蘭学園といえば簡単にいえば、光葉学園が女子高になったようなもの……かなり名高い進学校……ひとり知り合いがいたな……とても恐ろしい人が……

「そうですか………だから、著名人が多いですね………」

「ああ、って蒼君も一応、そうじゃない……」

そう…みたい

「北陽生なら知り合いがいるかもしれないな………」

「シユウから聞いたんですか？………」

………まあ、いるかな？」

「…なんだよ、今の間は………」

あいつが吹奏楽していればいれば………いるかな？

バーが慌ただしく動き出した………おそらく、今日は貸し切り………

………ていうか関係者だけ………だろうな

「蒼君？ごめんね、少し席外すね…ゆっくりしていてね」

「はい」

俺は注文した、パスタに手を出した、うん、海老や貝の素材の良さを崩さず美味しい………オリーブオイルが魚介類の風味にあっている。

不意にシュウに目が合った………驚いた顔したがすぐに微笑んできた………黒い髪の男

………確か、緑だったけど………そいつは不思議そうな顔をした………今朝みたいな嫉妬はない、おそらく、シュウにとって縁って人は来みたいものだと思う………趣向の合う親友………てところだろ、緑のほうは知らないけど………シュウは今は少し不良………みたいに見えるが昔は優等生………って風に見られてない………

………まあ、シュウは基本はお人よしで兄貴気質だから頼まれたら断れない………だから、こそ………新條みたいな人を引き寄せた………あれ以降、シュウは心に仮面を着けた………だけど、俺だけには心を開いてくれた………それが俺の………いや………俺だけの居場所………昔も………今も

「あいつは………」

ステージの上に見覚えのある人が……………ヤバいな、目が合った……………シユウが楽器の位置を尋ねているみたいだけど……………あいつ……………俺を見つけてニヤリと笑った…あーこわいこわい

「蒼君ごめんね……………どうしたの？顔が青いよ？」

「き、気のせいですよ」

雅樹さんは微笑みんた…

「蒼君？朱は中学の時はちゃんと…

「大丈夫です……………心配しなくてもわかってます…中学の時は友達とか、作ってないですよね？」

雅樹さんは驚いた顔になった

「驚きましたか？……………シユウは世渡りが下手ですからね……………それにシユウは基本なんでもできるけど、自分の感情や弱さを表すことやを良しとしない、けど、孤独感に弱いし、傷つけるのが嫌で誰と関わらないようにしてはいるけど、もとのお人好しは抜けてない」

雅樹さんは苦笑した……………その顔は困ったような、嬉しそうな

「3年間……………シュウもいろいろとありましたから……………俺もシュウのことがわからなくなっていたけど、ようやく前みたいになるようになった……………前以上に理解できるように、支えられるようになりたいなあ……………」

「なれるよ……………きっと」

ふわぁっと頭を撫でられた……………

「……………あれ？これは……………」

「眼帯ですか？今日、体育の時にシュウを庇って怪我して一緒に病院に行ったんですよ」

「そうだったんだ……………あの馬鹿……………言えればいいものを」

俺は片目でシュウを探した

「ははは……………酷い怪我じゃないですから大丈夫ですよ」

シュウは生徒にナンパされ困っている……こつちを見たシュウに、
「地獄に堕ちろ」ってジェスチャーしたらへこんだよ。」

「あははは………おい、緋人！来い朱を見るよ」

「どうしたんですか？マスター………別にいつも………
いや、なんか気が無くなっているけど………どう
したんだ？」

「いえ………少し、ナンパされていてムカついたから
「地獄に堕ちろ」ってジェスチャーしたらあんなことに………
………テヘ」

「テヘ………じゃねえよ、どうする………すごい落ち込ん
でるぞ」

バーが暗くなった………どうやら演奏が始まるみたい
だ………

【10】

演奏も終わり立食会みたいになっている…

「……………ところで蒼君？」

「……………何ですか？」

「……………朱とは付き合うのかい？」

「……………分からない」

「……………分からないって」

分からない……………好きだけど…

「……………俺さ…朱に依存していたんだよ……………だから居なくなつて絶望した……………表面だけ冷静になって中身はスカスカな心を朱との想い出で満たしては前に進めずにいた……………寂しさに苛まれて誰かと居ても笑えずにいた……………だから…」

「それでいいんだよ…」

「…………えっ？」

雅樹さんは穏やかな笑顔を湛えている…

「…………それは朱も同じさ…蒼君の代わりを探しても誰も代わりにはなれなかった」

「嘘？」

俺は思わず聞き返した…

「蒼君…………愛し合うつてさ…………他の誰にも代わりにはなれない関係に至ることなんだよ…………代わりを探しても見つかるはずがないよ…………本当に愛し合っているなら…………愛しているなら逃げずに気持ちをぶつける以外は前には進めないよ…………蒼君は素直に朱を頼ればいいよ…」

「…………うん」

光葉学園に来て朱と再会して自分がどれだけ朱を愛してるか知った……小日向くんすら嫉妬してしまうくらいに……気付かないふりして逃げてクールに見せていた……

「まさ……マスター！A席にナポリタンとホットコーヒーの注文が入りました……ってソウ？いつの間に？」

シュウは俺を見ると焦り出した……

「いや……いつかは来ようとは思っていたから……」

「……だからって……」

「朱……お前は蒼君が怪我しているなら早く言えよな……全く……今日は帰っていいぞ」

雅樹さんは苺のジェラートを俺の前には置いた

「でも……」

「あまりうだうだ言つと蒼君にバラすぞ？色々…」

色々ってなんだろう？

「色々ってなんだよ」

「それは朱の蒼君への愛と泣き言と節操のなさ……」

「あーあーあー分かったよ帰る準備するよ」

後半から聞こえなかったけど……シユウは青ざめながら更衣室に向かった。

「……………雅樹さん？これって……」

ミルクと苺のジェラートにいつの間にかアイスティーが注がれてる……

「サービス」

出されてしまったのは仕方ない……スプーンでジェラートをすくった……

「……………美味しい…」

ミルクの甘さが程よく苺の旨味を出してる……………雅樹さんはふつと笑った…

「……………朱が蒼君がスイーツが好きって聞いていたから…作ってみたんだ……………気に入ったか？」

「はい……………あと…蒼でいいです…朱からどこまで聞いているんですか？」

「ああ…分かった…あと俺も雅樹で構わないよ………………ほとんど…朱はアイツは信頼した人以外には蒼のことを話していないと思うよ……………というか蒼のこと以外はほとんど話さないよ」

なんか恥ずかしい…

「終わったぞ」

Tシャツとジーパンと格好いい……………男らしい…なんか…羨ましい…俺は華奢だし顔は普通だからそういうのは似合わないだね…

「行きますね…いくらですか？」

「あー知らない…子供は大人に甘えとけ」

「でも…」

「雅樹は馬鹿が付くほどお人好しだから何言っても無駄だぞ」

「シュウが迷惑を掛けまくったのに…」

「なんで迷惑を掛けたの知っているだよ」

「一応かまかけたただけなんだけど…」

「かまかけたただだよ……………シュウは感情と行動が何気に直結してるんだよ」

「…………ソウは何気に性格が悪いんだよ…………」

「シュウには言われたくないですう」

「ソウは密かとSっ気があるんだよ」

「くっ……………あはははは」

雅樹は急に笑いだした…

「いや…朱がここまで子供じみたことするとは…」

「雅樹…」

「雅樹…」

暖かい笑みを浮かべて俺たちを見る雅樹……………その目はカイに似ていて優しさに溢れてる…

「じゃあ行くか？」

「行こう…雅樹…また来ますね？」

「…またな」

俺たちは雅樹のバーを出た…シックな木製のカンバンにgemin
iと書かれている

「ジェミニ?」

「どうかした?ソウ…」

「いや……バーの名前…」

「ジェミニがどうかしたか?」

ジェミニって確か…

「ギリシャ神話の……星座の名前だよ?」

「へえー?」

「それに…」

「それに？」

ジェミニってまるで…

「俺たちのことだよな？」

「俺達？」

シュウは首を傾げてる…

「つまり…双子…」

「双子？」

「うん…双子座…」

「へえーなんの因縁やら」

「……………」

「……………どうかした？」

黙り込んだ俺の顔をシュウは覗き込んだ…

「いや…確かに凄い偶然だな…って…神話だと…兄のカストルが他愛ない争いで死んで弟のポルックスは嘆いて死のうとするけど不死の肉体だったために死ぬことは出来ず父のゼウスに頼み兄のカストルといつまでも一緒にいられるように双子座にしてもらった…」

「なるほど…神話通りにいつまでも一緒に居ような」

シュウは手を差し出した。

「……………うん…」

「……………って言うてもどこに行くか？」

「俺たちのマンションに行く」

俺はシュウの手をとった。

「いいぞ」

俺は隣のマンションに向かった…

「……………相変わらずでかいな…」

「……………そうだね…こつちだよ…」

俺たちはエレベーターに乗り込んだ…

「そついえばソウたちは何階に住んでるだ？」

「……………何階って…最上階…」

「……………マジ？」

「……………うん、マジだよ」

スゲーって言うてるシュウと俺はエレベーターから降りた。

「中也広いな…」

「そこら辺に座って…」

俺は自分の部屋にシュウを入れた……俺も紅茶と適当なお菓子を
持って入った。

「ありがとう…お腹が空いていたんだよな」

シュウはお菓子に食べ出した……バーでお腹一杯食べた俺は紅茶を
飲んだ…

「ソウは食べないのか？」

「いや…雅樹のバーでたくさん食べたから」

「そうか…」

俺たちは何故か沈黙した…ある程度食べ終わったシュウはしばらく俺を見たあとにキスをした…最初は軽く優しく……次第に深く激しいキスを…

「シュ…ん…ん…ッ」

俺は酸素を求めて一旦シュウの唇を離して息を吸い込もうとした…
…その僅かに口を開けた瞬間……シュウは指を俺の口に入れた…

「……………ヒュウ？」

「やりたい…」

もしかしてやられそう？

「……………くはぁ……………駄目だよ…………シュウ」

「……………なんで？」

泣きそうなシュウの顔に揺らぎそうになったが踏みとどまった…けど…シュウの顔を直視出来ずに俯いた。

「シュウ……………今まで隠していたけど……………俺はもしかしたら2学期まで生きられないかもしれない……………幼い頃から重い病気を患っているんだよ……………だか……………んん……………シュウ？」

『だから身体を重ねられない』と言おうとしたのをシュウの口によって塞がれた。

「……………ソウは俺がどんなにソウを愛してるか知らないな……………」

「は？」

思わず生返事をしてしまった……………

「……………俺はこの三年間…決して満たされることのない想いを抱いて生きてきたんだよ」

シュウは俺の服に手を入れた……………

「……………今さら独りで生きていけないよ……………ソウが死ぬ時は俺の死

ぬ時だよ」

「いやだあよ……」

涙声で掠れた声で何とか話す…

「俺が死ぬのが嫌なら絶対生きることだね……教えてあげるよ……俺がどのくらいソウを愛してるかを」

耳元で話す甘い声に俺の涙腺を刺激して一筋の涙が俺の頬を伝った……抵抗する気なんて起きず全てをシュウに委ねた。

「とりあえず……お風呂に行こうか？汗かいたし」

シュウは動かない俺の腰を抱いて風呂場に向かった。

「シュウ……」

「なに？」

なに？……じゃないなんでシュウに脱がされないといけないんだよ……俺はタオルで下半身を隠した……

「……………チツ……」

「……………なんで舌打ちしたの？」

「気にするな」

気にするな……………って……とりあえず俺は先に浴室に入った……

「……………」

俺は無言でシャワーを頭から浴びた……………まだシュウには言えないこともあるだから不安は拭えない……………何があっても受け入れてくれた人たちの為にも強くないといけない……………心身共に……きつとシ

ユウや小日向たちより脆くて弱いから……今は言えない……でも
いつかは言わないと……和哉をあんなに傷付けた以上は逃げてはいけ
ない……和哉は気にするなって言ってくれたけど……考え事し
てると自分の腕より太い腕が俺の突起を摘まんのだ……

「……………ッ……シユウ？」

「……………」

「……………ッ……くはあ……」

声を我慢し過ぎて変な声が出た……そんなことはお構い無しに無言で
俺の突起を弄るシユウ……俺が振り向こうすると強く摘ままれた。

「……………ッ……ああああ」

腰が砕けた俺を片手で支えた……

「……………俺が洗うよ」

耳がおかしくなったか？

「……………はい？」

了承の返事と取ったシュウはボディークリームをスポンジに馴染ました。

「……………って違う…待って…」

「……………なにが？」

耳元に不機嫌全開な声が聞こえた。

「……………あの…恥ずかしながら……………自分で
……………って駄目？」

「うん」

即答！？

「……………ッ……………」

「可愛い」

可愛いって……可愛いってなんだよ……俺は小日向くんより背は高いし顔も女顔じゃないし中性的でもないのに…

「…………可愛いってなんだよ…」

「普段綺麗な顔しているから顔を真っ赤にして可愛い…」

「綺麗って俺は普通だろ？」

「……………はあ…まあいい……自分で洗いたいならあとで俺の言うこと聞くならしいよ…」

「わかった…」

シュウは俺にスポンジを渡してシャワーを浴びた。

「やだ！絶対嫌だ！！」

「聞くって言ったよな？」

「言っただけど………だけども……」

一緒に湯船に入るなんて………無理

「………そんなに嫌か？」

泣きそうなシュウの顔に………俺は思わず……

「………わかった……入ろう」

と言ってしまった……

「……………そんなに離れるなよ……」

タオルをかけてるとはいえ…

「……………ッ……シュウ？」

シュウは俺の腰を抱いて自分の前に寄せた……

「こうしてソウと触れ合うのは久しぶり……いい香り」

「俺に引っ付いて楽しいか？」

思わず疑問にしていたことを聞いてみた……

「うん？ああ楽しいんじゃない満たされるんだよ」

「満たされる？」

「心がソウを求めてる……触れてるだけでも高調感が溢れてくる……」

「……………ッ…」

俺が言葉に詰まるとシュウは首に顔を埋めた。

「……………!？」

大きくてゴツゴツした手が俺の中心を掴んだ。

「……………気持ちいい？」

片手で俺の中心を掴んだまま耳元でシュウは囁いた…

フルフル…

「……………ふん…」

シュウは俺の中心を掴んだまま耳を舐めた……………ビチャビチャと水音が聞こえ感じるのをひたすら耐えてる俺の中心は半勃ちした…

「……………シュウ…」

「……………気持ちいい？」

「……………うっん…」

俺が否定すると俺のソレを軽く扱った…

「……………ひゃ？」

「……………気持ちいいの間違いだろ？ 軀はこんなに反応してるぞ？」

「……………ッ…」

俺が羞恥に顔を赤らめるとシュウは勃起上がったソレを速く扱いだした。

「……………シュウ！イク！イちゃう！これ以上はダメ！あああああ
ああ」

「……………ソウ？」

「……………はあはあはあ……………」

心配そうに顔をしているシュウ…

「……………はぁ…なんか色んな意味で逆上せそう…」

「……………大丈夫か？」

「……………大丈夫……………なわけないだろ？ シュウのように体力無いんだから……………」

シュウは湯船から出て俺の髪を撫でた…

「ソウが体力無さすぎるだけだよ」

「……………悪かったな……………」

「……………ってソウは出ないの？」

「……………立てない……………」

「はっ」

「どっかの誰かさんが風呂場でやるから立てないんだよ」

「ゴメンゴメン」

シュウは俺の両膝と頭に……………って

「これって……」

……………お姫様だっこ……だよな……………シュウは風呂場出て洗面所で俺の身体を拭いた……自分で拭きたかったけど……射精後の脱力感で身体が思うように動かない……

「……………って着替え準備しないで入ったからそのままソウの部屋に行かないと行けないな……」

……………言っが否や俺をまたお姫様だっこして部屋まで運んだ……

「……………意外と筋肉あるね」

シュウは俺をベッドに降ろした……

「……………ソウもな…少しだけだけど筋肉あるんだな」

俺の胸を指でなぞりながらシュウは顔を赤らめた…

「……………なあ…シュウ？」

「……………なに？」

「……………最後までやるの？」

「……………嫌か？」

「……………嫌と言うより後悔するよ？」

シュウはため息をついて俺の髪を撫でた…

「……………またかよ……………それはやつてもやらなくても同じだぞ？……………それに俺はもうソウから離れたくない…」

優しい笑顔で俺を見つめるシュウ…

「まあ……嫌なら仕方無いけど…」

「……嫌……ではない」

シュウは苦笑をして立ち上がった…

「無理するなって」

俺はシュウの手を握った…

「……………」

「……………ソウ？」

シュウの欲を湛えた瞳が俺を突き刺すように見つめた…背筋がゾク
リと震えた…

「……………ソウ……俺…多分あとから止めて言われても止まらな
いよ……………いい？」

俺のゆっくりうなずいた…

「……………はぁ……………そっちこそ後悔するなよ？」

シュウはそれだけを言うと舌を俺の首に走られた……………次第に胸や突起に腹を舐め回した……………

「……………あんまり舐めるなよ……………美味しいもんでも綺麗なもんでも無いだろ」

「綺麗な身体してるし美味しいよ」

シュウは俺の身体を反転させた……………背骨を舐め回されると同時に尻を揉まれた……………思わず声を上げそっになった……………

「声我慢するなよな……………」

「……………ムゲツ」

シュウは俺の口に指を入れ動かされた……………

「……………んん……………あ…あ！あん…」

シュウの指が抜かれて口を塞ぐものが消えたために喘ぎ声を出してしまった。

「いい声で鳴くね」

四つん這いの状態でいるためシュウの顔が分からない…が甘い声を聞く限り感じているみたい……………尻を強弱をつけて揉まれ、背中に舌を走らせている……………俺の足はすでにガクガクで落ちそうだがシュウが尻を掴んだ状態なので倒れることが出来ずにいる

「……………はあはあ……………シュウウ」

シュウは俺の身体をまた反転させた……………俺の勃起上がった中心が露になり顔に熱が集まるのを感じる…俺は足で隠したがシュウは俺の足の間に入り俺の勃起上がった卑猥な中心を隠すことができなくなつた…

「……………綺麗だよ…クスッ…」

「……………シュウ…ひゃん？あつ…」

シュウは俺の太股を吸ったり噛んだり舐めたりしている……

「……ちょっと待った……」

「待てない」

シュウは太股から内腿へと舌を走らせた……ただ舐められているだけなのに軀は熱いになった……疼き出した軀を擦って熱を冷まそうとするが逃れることは出来ずにシュウの愛撫でにただ飲まれるだけ……

「……後悔してる？……でも……止めないよ……ゴメンね……ソウ」

「……ははは……」

シュウはシーツを力一杯握り締める俺に激しく深いキスを落とす……段々酸欠になり辛くなった俺はシュウをどこそとにするが体格と力の差は歴然なためびくともしない……どちらの唾液が分からない液体が俺の口から溢れた……シュウはようやく唇を離れた……唾液が口から溢れ息を切らし脱力しきった俺を見て微笑んだあと俺に強い衝撃が走った

「……ッ……くは……あん……あああん……はあはあはあ」

あまりの衝撃に喘ぎ声を出してしまった……体内に何かが打ち込まれた……脱力していたためにすんなり入ったがその衝撃がすごいために全身が電撃を受けたみたいに震えた……俺は目の前にあるシュウを見た……いつもは澄んだ淡い茶色い孤高の瞳が今はまるで熱い欲情に支配され獰猛な肉食獣と思わせるほど飢えた瞳をしていた、その瞳が俺をまるで喰うと言っているようで身震いをした……恐怖はないが以前は感じることはないシュウの情熱的で男らしい一面が俺をさらに酔わせた……無言のシュウの中心を俺の腰に打ち付けた……軀に快感が走り俺の理性を蕩けさせた……激しい律動で俺の軀に熱が帯びた……ただ一心不乱に中心を打ち付けるシュウ……感じてるせいか段々汗ばんできている……その雫がシュウの男の色気を倍増させ律動は俺の頭をシュウで支配された……

「……………くッ……」

「だから……声を我慢するなよな……」

律動止めてシュウは俺の唇をなぞった……

「恥ずかしいから嫌だ……」

シュウの指は俺の歯列なぞる……わずかな仕草でも自分にはない色気を放つ

「……………なに感じてるだよ」

「……………うるさい……………悪いか？」

「……………悪くないけど……………素直なのは身体だけか……………鳴かないなら鳴かせてやるだけさ」

言うが否や律動は始まる……………あまりにも激しいために声を抑えきれない

「……………あッあッはげ……………しい……………おか……………しく……………なちゃう……………よ……………シュウ……………」

「……………なれよ」

「……………うんああああ……………」

俺が喘ぐたびに激しさを増すシュウの律動……………俺の軀はシュウの律動に支配された……………

「もう……………イキそう……………」

「……………イケよ……………てか……………俺も限界……………」

息が荒いシュウは俺の最奥を突いた……俺は白濁の欲を解き放った……俺の中にも熱いなが流れた……余韻に浸りながら雅樹に言われたことを思い出した……愛することは代わりにはなれない誰かになること……

もう……俺は……俺たちは引き返せない……前に進むしかない……過去に何があるうと……未来に何が待っている……ゆっくり余韻に浸っているシュウが何故か律動を始めた……

「……シュウ？ひゃ……ちよっ……待て」

「待てない……言っただろ？……後悔するなよ……って」

言っただろ？……じゃない……あんなに激しくして……シュウは逃げようとした俺の腰を掴まえた

「なあ……ソウ？頼むから俺だけを見てよ……俺はソウしか見れないから……」

シュウの悲しく呟いた……一瞬怯んだ俺の軀に激しい律動の衝撃が襲い掛かる……日頃の表情の裏に隠された……シュウの独占欲と熱意のせいでシュウにされるがままに軀を貪らせてしまった……

【11】

「うん」

身体がだるい……あのバカ！手加減なしに明け方までやりやがって……
……どういう性欲してんるだ？

「……………ソウ」

シュウが俺を抱き寄せた瞬間に俺の内壁にズリツと刺激が走った……

「ひゃん!？」

まさか……

「……………ソウ?どうした？」

シュウが動くたびに俺の内壁に刺激が走り身体が震える……

「早く抜け！」

「何を？」

「……………ッ……」

顔に熱が集まるのが分かる……………シュウも俺を見て何か分かったらしい……………

「……………はん！？シュウ？おおきッ……………」

俺の内壁がシュウのモノの膨張で窮屈なる……………

「……………ソウ？力抜いて……………」

シュウは激しくキスをする……………俺が呆けてる間に素早く騎乗体型にした……………

「……………あん？なに？シュウ……………」

「俺をイカしたら抜いてやるよ……………」

嘘だろ？

「……………シ…シュウ…また変な冗談を……………あんあん…やめッ
…」

シュウは冗談と言われたのが気に入らないらしく腰を打ち付けた……

「……………腰を振って俺をイカせよ…ソウ」

俺はシュウをイカすために腰を振るとシュウは腰を打ち付けた。

「…ああ…なんで？シュウ…」

「ちゃんと腰を振れよ」

俺は激しく腰を振る……………少しでも気を緩めればシュウに腰を打ち付けられ俺がイキそうになる……

「……………はあはあ……………お願い…抜いてえ…はあん！？」

「いいからイカせて……」

俺は必死に腰を振る…… シュウのモノが内壁を刺激して頭がクラクラする……

「ソウ！そろそろイクから止まれ！！」

「…………… ああああああ……………」

シュウが俺の中で果てた…… その勢いで俺は腰を落としてしまい最奥を突かれ果てた…………… 息は荒れて全身から力が抜けた

「はあはあはあ…………… ツ…………… 何すんだよバカ……………」

「ソウが悪いんだよ？」

「なんでだよ！！」

シュウは部屋にある鏡を指した……

「鏡を見てよ………凄いエロい顔してるよ………ソウ………」

いつの間にか俺の後ろから抱き着いている………シユウの体温が暖かくて心地よい……裸のせいか体温が直に感じてなんか恥ずかしい………

「………してないだろ？」

「鏡を見てから言つてよ」

シユウは無理矢理俺の顎を上げて鏡を見せつけた………顔を真っ赤にして感じている蒼い髪の毛………って俺だけど……俺は必死に赤髪の毛少年に抵抗している………

「ああ………」

「な？凄いいエロい顔だろ？」

足を上げられ結合部分か卑猥に見え羞恥に顔を赤らめる俺と意地の悪い視線を送るシユウが鏡に写る

「恥ずかしい……離してよ」

「嫌だ…俺はまだまだ満足してないよ…」

律動が始まる……耳や首筋を厭らしい音を立てながら舐められ…片腕は突起を揉んだり弄ったりしている……俺自身にゴツゴツした何かに包まれた……しばらくするとそれは俺自身を激しく扱い俺は射精感を押さえるのに必死だ…突起を弄る手は口に運ばれた……

「舐めろ…ソウ」

「ふわぁ…」

ピチャッピチャッと水音が部屋にこだまする……充分に湿った指で突起を弄った……気持ちよさに涙が溢れる……律動も俺自身を激しく扱う手も加速して行った……俺はただ与えられる快感に形だけの抵抗をして軀を震わして口から唾液と喘ぎ声が厭らしく溢れた……

「……………ッ…あああああ」

「……………くッ」

何度目になるか分からない絶頂を迎えた……

「……………気絶するなよ…まだまだこれからだ…ソウ」

「……………シュウ…もう…………無理……」

「……………と言われても止まらないよ…今さら」

「……………あんあん……………はげ……………しい」

あれから何度か喘ぎ声を上げさせられイカされ胃に暖かい物を叩きつけられた……………シュウの圧倒的な性欲と愛撫で俺はただ貪られ犯された……………軀も心も麻薬のようなセックスに支配されていった……………もうどうすることもできない快感に捕らわれていくのが自分でも分かった……………

「……………」

いつの間にか汗と精子でベトベトした身体は綺麗に洗われていて服を着せられソファーに寝ていた……情事が夢みたいに思えるほど……ベッドも綺麗にされて……虚しさがこみ上げてくる………もつとも……

「痛っ……」

腰に残る熱い痛みが現実……そう痛みすら快感に……情事の烙印として感じてしまう……まだ息も整わず焦点の定まらない視線が宙をさま迷う………白い天井を見ながらシユウはどこに行っただかを考えていた……

「……………ッ」

酷い頭痛が起きて考えを放棄させる……視界が歪む……音が消え痛みだけが残る……情事とは違う痛みが……だから気付けなかった……

「……………ウ！…ソウ！！」

「……………シュウ？」

俺を心配する愛しい人……………頭痛はいつの間にか無くなり…安心感が湧いてきた

「大丈夫か？流石に少しやり過ぎたか？」

……………少し？

「シュウ……………君は人間かい？あれだけ犯しておいて……………少し？
……………しかもなんでそんなに元気そうなんだよ」

「受けは体力が必要なんだよ……………それに俺はソウより鍛えてるし」

「体力が必要で俺が体力ないのを分かっているならなぜあそこまでがつつり犯したんだ？」

「ゴメン……………だけどソウが悪いんだよ…妖艶な色気を放つから

理性が崩れたんだから」

「放ってない……」

手応えのないやり取り……まるであの頃みたいだ……

「……………どこに行っていたの？」

「ああ……雅樹の所にサンドイッチを貰いに……ソウはまだ腰が痛むかな………思ってた……」

シユウはテーブルにあるバスケットを指して答えた

「腰が痛いのはどっかの誰かさんがやりまくったせいだな」

「それより早く食べよう……腹減っただろ？」

「別に？」

可愛くないなとため息をつきながらポットに茶葉とお湯を淹れて力

ツプを取った……

「……………ッ……」

立ち上がるうとする痛みで顔が歪む……………それに気付いたシュウが近付いてきた。

「まだ痛むだろ？」

言っなりお姫様だっこ……………おかしくない？身長は同じくらいなのに軽々と……………テーブルに座るとシュウは自分の膝に俺を座らせた……………

「……………おい……」

「なに？」

なんでこいつは顔の皮が厚いんだよ……………

「降ろせ……」

「降りればいいじゃん……」

人が腰が痛いのを知ってくるくせに……

「……………なに？」

「食べないのか？」

俺はサンドイッチに手を伸ばすとシュウはひょいと俺の手を掠めた
……

「はい……」

無為言わずに食わす気だ……抵抗を許さないと言わんばかりに腰を
がっしり掴みサンドイッチをつき出した……

「……………仕方ない……」

俺はシュウが差し出しているサンドイッチを一口食べて少し咀嚼し
たあとゴクツと音を立てて飲み込んだ……シュウを見上げると……苦
笑しながら俺を見ていた。

「お前……本当にタチが悪いな……………自分で食わせれば良かった」

「？」

首を傾げるとため息をつかれサンドイッチを食べさせられた。

「しかし……ソウ……お前あまり食べないな……」

「そうか？」

情事も手伝ってサンドイッチを2つくらいしか食べられなかった

「だから痩せてるんだよ……俺よりこんなに細いし……」

腰をさわさわと触りながら言ってきた

「…………ふん」

シユウは俺があまり興味無さそうに答えると苦笑しながらサンドイッチに手をつけた……俺はシユウの構いぶりにため息をつきながらダージリンティーを飲んだ……

「……………って今何時だ？」

学校には行けないけど気にはなる……………

「もう4時……………時が経つのは早いね」

「早いね…じゃない…お前が風呂場で盛ってやったからこんな時間になっっているんだよ」

信じられないことにあれだけやって風呂場もバックを奪われた……………俺が散々無理って言っても止めるどころか加速していく一方でおかげで風呂場での……………いや、部屋の方から記憶が曖昧なくらい激しくして……………少しは俺を労れよ

「…仕方ないだろ？ソウが甘い声で誘うから……………」

「出してねえよ」

喘いだけど……………誘った覚えはない……………

「ソウはお子ちゃまだからな」

「はあ…なんか疲れた…もう寝よ？」

「そうだな…昨日はほとんど寝てないし」

寝てないのはシュウのせいだが…俺はシュウに抱えられて寝室に下ろされた…情事の疲れのせいかな朝までぐっすり眠れた…

【12】

シユウと心を通わせ躰を重ねて初めての学校……心が晴れやかと不安が入り混じる……同性と双子の兄弟と言うことは置いといても色々ある……シユウにとっては俺がそばで幸せなら何でもいいと言っが…。

「そっついえばなんで蒼が居るんだ？」

「ああ……カイしばらくは帰れないから雅樹のところに行けっ」と

実は今、雅樹の家に居ます……鍵はカイが郵便で送って来たのさ。

「聞いてないぞ」

「あと、拒否つたら一年間は給料はなしって」

「理不尽だ……」

「朝からうるさい……どうせ、今さら1人増えようが減ろうが変わらないだろ？」

「だけど……」

「だったら断れよ………もっともお節介のお前にそれができるとは思えないがな」

ぐつと押し黙る雅樹……。

「それより早く行くぞ………遅刻するぞ」

「シュウが遅刻を気にするなんて…」

「全く………いつもなら開き直るのにね？」

「ぶつくさ言っでないで行くぞ」

玄関で靴に履き替え学校に向かった。

あつという間に放課後…いつものメンツ…斉藤、シュウ、和哉、小日向で雑談中…。

「お疲れ様です」

「お疲れ…」

時間は不思議なもので楽しい時間は光陰矢のごとし……長い時間を一気に過ぎていく……逆に辛い時間はとても長く感じる……本当に時間は不思議だ……いや、実際は時の流れは変わらないのだから不思議なのは人の感情か？……もしかして……ただ、図々しいだけか？

「しかし……なんで俺達はHRが終わっても教室に残っているんだよ」

「遥さんが蒼と七海に話があるって……」

「話って？」

「知らない……何でも大切な話みたい」

「ふうん？それは置いといて幸人だった？最近見てないけど…」

「そつえば…」

「前波君は怪我で入院してますよ」

いつの間にか来ていた遙さんは話を聞いていたのか俺達の疑問に答えてくれた。

「すみません…遅くなってしまつて…ちょっと会議が長引いてしまつて…」

金髪の美形さんも一緒に来ていた…誰だろう？

「それより話つてなんだ？」

「それは…今の話と関係するけど…とりあえず…自己紹介な？」

いかにもちゃらちゃらしていそうな…。

「生徒会の副会長の真田^{サナダ} 夏樹^{ナツキ}っていうんだぜ！よろしくな？」

「……………不本意だけど、一応自己紹介してやる…七海 朱
だ」

シュウが不機嫌…まあ…いつものことだけど…。

「斉藤 龍真です」

ふんふんと何かを物色するようにふたりを見定めている…。

「ふたりとも好みだな…よろしくな？」

…と言いながら斉藤の頬にキスをしてにやりと笑う。

「は？」

次にシュウの頬にキスを……………する前に俺が殴り飛ばした。

「ぐはあ！？」

「おい、次やったらぶっ飛ばすぞ？」

「やれやれ…嫉妬するとは……………モテる男は辛いぜ…」

こいつ……………。

「遥先輩？話ってなんですか？」

「実は最近……………」

「……………まだ自己紹介の途中だろ？」

しつこい…。

「結崎 蒼です……………なるべく…いや、絶対に短い付き合いにした
いです」

「この子はシンデレか？」

……………もう家に帰りたい…。

「黙りなさい……………夏樹が口を挟むと話が前に進まない」

遥先輩……………ナイス。

「あ！和哉と歩は久しぶりだね？よろしく」

「はい…よろしく、お願いします…真田先輩」

「はい……………あまり、蒼を怒らせないでください……………止める
の大変なんですよ」

「確かに美人だが…俺の好みではない…」

宇宙人か？こいつ？

「それより……………最近、光葉学園生が相次いで襲撃を受けて
ます」

痺れを切らした遙先輩はいきなり本題に移った。

「襲撃？」

「前波君もこの前、襲撃を受けて怪我をしたんですよ」

そいつは穏やかな話ではないな………光葉学園生で襲撃を受けたということは…。

「でも、なんで俺達を呼んだんですか？俺もソウもその事件とは無関係なはずですよ？………龍真と和哉は知らんが？」

さり気なく疑っているし…。

「違うよ、疑っているのではなく………狙われる可能性が高いから警告しに来たんですよね？」

「ええ…今まで襲われたのは光葉学園に自宅から通っているんですよ」

「？」

説明がややこしいな…。

「つまりな…」

「この光葉学園は寮生と俺達みたいに自宅から通う人がいるが普通に受験して入学してきたのと…奨学金をもらって日本各地から来たのがいるのは分かるよな？」

真田先輩を遮って俺は説明した。

「ああ…そこは受験前のパンフで見たから分かるが…」

「そいつらは主に自宅から遠いところから来てる人が多いから寮生なんだが…自宅から来る人はお金持ちが多いから…今回、襲撃を受けたのはそいつらだろ？」

「ええ………補足ありがとうございます………学園内に寮がある為にセキュリティは万全なんです、流石に寮外の人になると安全

管理が大変なんです……プライベートの問題もありますし……」

「でもなんで？」

その答えは簡単だったりする……人は嫉妬深い……救いようが無いくらい……不幸は都合の良い道具になる……付け込んだり、言い訳にしたり……現実逃避の理由にしたり……その癖に他人の幸せを素直に祝福する人間は少ない……いや、それだけではない……自分を否定する人の気持ちを理解しようとする人間はさらに少ない……人間ほど……図々しい生き物はいないだろ……自分が正しいと思うもの、自分を正しいと肯定するもの……には寛大で逆に……自分の過ちを攻める者にはとても残虐だ……誰も過ちを知らずには生きてはいけないのに……誰も傷つけずに……誰も傷つかずには生きてはいけないのに……それに気付かずに……。

「どうかしましたか？結崎くん？」

「……いや……何でもない」

どうやら考え込んでいたようだな…。

「俺が守ってあげるから安心してよ……朱に龍真？」

「気安く名前で呼ぶな？」

「そうです、名前です」

「どうしたんですか？」

「みなさん…どうして苗字で呼んでるんですか？」

どうしてって……。

「成り行き？」

「特に蒼君と朱君は双子なんですから苗字で呼ぶより名前で呼んだほうが分かりやすいと思いますよ」

真田先輩の話はスルーしたし。

「そついえばそうだな？」

「…まあ…別にいいけど」

「確かに七海と呼ばれると反応してしまうし……」

養子に入ってまだ二年くらいだし、時々呼ばれてるのが俺かシユウか分からない時もあるし。

「これからはみんな名前で呼び合おう」

「ああ……」

しかし………気がかりなのは…犯人だよな…収まればいいが…。

「どうした？蒼」

心配そうに覗き込む和哉…。

「いや、そんな事件が起きてるなら明るいうちに帰るほうがいいと思うって」

「それもそうだな…」

なぜかいち早く賛同した真田先輩…。

「確かに…夏樹なんかに構ってないで帰りましょう……夏樹…ちゃんと仕事を終えてから帰ってくださいね？」

「ゲッ」

半ば強制的に退場させられた真田先輩……わざわざ来なくても良かったのでは…。

「じゃあ……またな……歩に龍真」

「また明日……蒼くんに朱くんに和哉くんに遥先輩」

ふたりは近くに住んでるらしく最近仲良くなってきた。

「私たちも帰りましょうか？」

「そうだな」

俺達も荷物をまとめ学校をあとにした。

六月だと言うのに雨が全然降らない…天気予報だと明日も晴れだと…。

「どうしたか？」

「……何でもないよ」

今年は空梅雨か…。

「今回の事件の動機はなんだろう?」

「……おそらく、嫉妬だろ」

人の幸せのパラメータで一番簡単な基準となるのがお金だ……大抵の人間がお金さえあればその人は「幸せな人だ」と見ることがある……それが正しいかどうかは別としても……自分が不幸だと思えば思うほど……幸せそうな人を見ると妬ましくなる……行き当たりのない感情は関係のないところに行きつく……本人とは無関係で……だけれども、幸せそうな人へと…。

「………だとうな……」

「三人とも……………これからは私と一緒に帰りましょう」

「……………それが仕事だから？」

遥先輩は降参と手を上げる…。

「いつから気付いていたんですか？」

「それは初めから……………あんな胡散臭い笑顔で出迎えられれば誰でも勘付くよ」

「何の話をしている？」

「ああ……………遥先輩はあれだよ」

「B」でよくあるあれか？」

「あれって？」

「つまり……海斗…結崎の隠密だよ…小さい時から訓練を受けた精鋭…」

「そうです……あなた達に危害を加える人物からの護衛を担当してます…」

「達……って俺も含まれてるのか？」

「もちろんですよ」

これが金持ちのジレンマの象徴とでもいうべきか…。

「…………初めて聞きましたよ…遙さん?…………てか、もしかして夏樹先輩も?」

「ごめんなさい…あまり巻き込みたくはなかったので……………すいません」

和哉は知らなかったのか…鋭いのか鈍いのか?

「今や巻き込むところが当事者だけだね」

「ですよね」

「しかし、大変じゃないか?」

「そうですね……………最近は楽ですよ……………こつやって和哉と一緒にいれる時間が増えたし」

「しかし……ここまでだと……結崎の力が思い知らされる」

結崎、左条院、八城………この世界の三大名家………とまで言われたほどの家だから当然だと思う……妬む人間は数知れずだろう。

「………私も噂程度ですが八城の跡継ぎが光葉学園にいたとか……」

「………」

「なんだか………平凡な俺じゃ手の届かない話になっているし」

能天気にかしげる和哉にめまいを覚える……。

「………しかし………そいつ……格好の餌食にならないか？」

「……………大丈夫だろ…」

「蒼君はその子が誰か知っているんですか？」

「ああ…知ってる…海斗から聞いた」

「誰？」

「内緒……………他人の家庭の事情に首を突っ込むとろくなことにならないからな」

それに俺が口出しする必要もなし…そもそも自分のことで精いっぱい
の俺が言う資格もないし…それにそいつは俺以上に強いから…主
に精神的に…。

今年は空梅雨かな？そっいえばアイツが狂ったのは……………確か空
梅雨の六月が終わってからだったか？

「……………どうした？」

「いや、何でもない」

夏が近づいてくる…あまり好きではないこの季節……………シュウがそばにいるのに拭いきれない不安…それがなんなのか……………気付くのはもう少し後…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3424p/>

inncoent・blue

2011年10月8日12時48分発行